

古りたる染物に斑点の出るを星さはいふなり。その抜
 出せぬ巻となりけらし。著者は何故に「星」と命じた
 るを知らずとて逃れむに、人々押して問ひ詰むる程の
 事ありまらむ。星一ツ僅かに見たり梅の園。誰の星、彼
 の星、心にかなひたるを思ひ、く選み給はれ。中には生の
 星に合ひたるもあらむかし。

月 日

五黄ノ星の 水生

しるす



29-202

(1)

目次

目次

演劇脚本

源頼朝……………一

源義仲……………一五九

佐々木盛綱……………二六三

短篇小説

絶壁……………三八

水室守……………三九一

非常線……………四二一

賣國奴の兒……………四五五



大競争

探檢實記

五二

別子銅山變災視察錄

五三

姥嶋探檢記

六一

六甲山鳴動探檢記

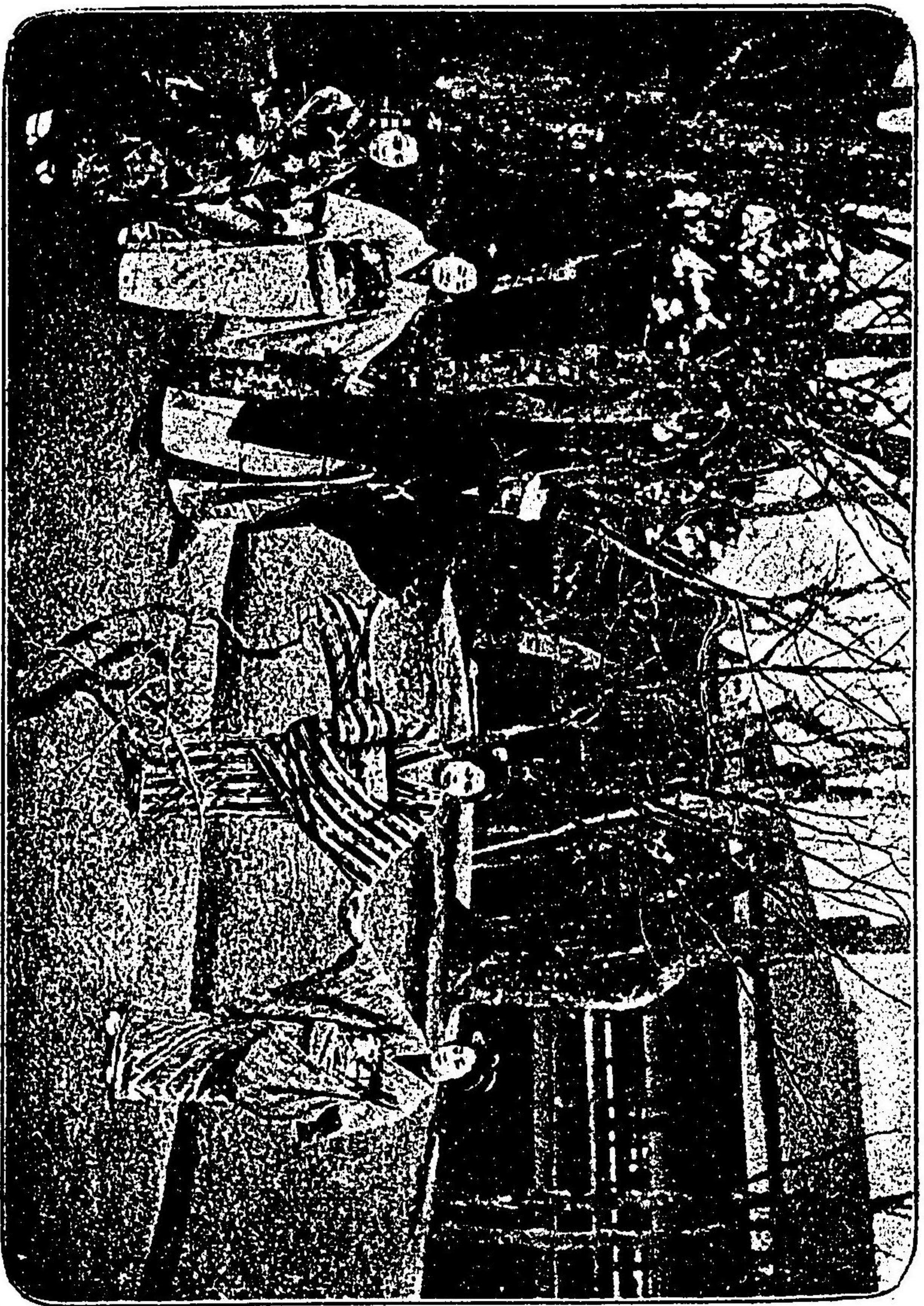
六五



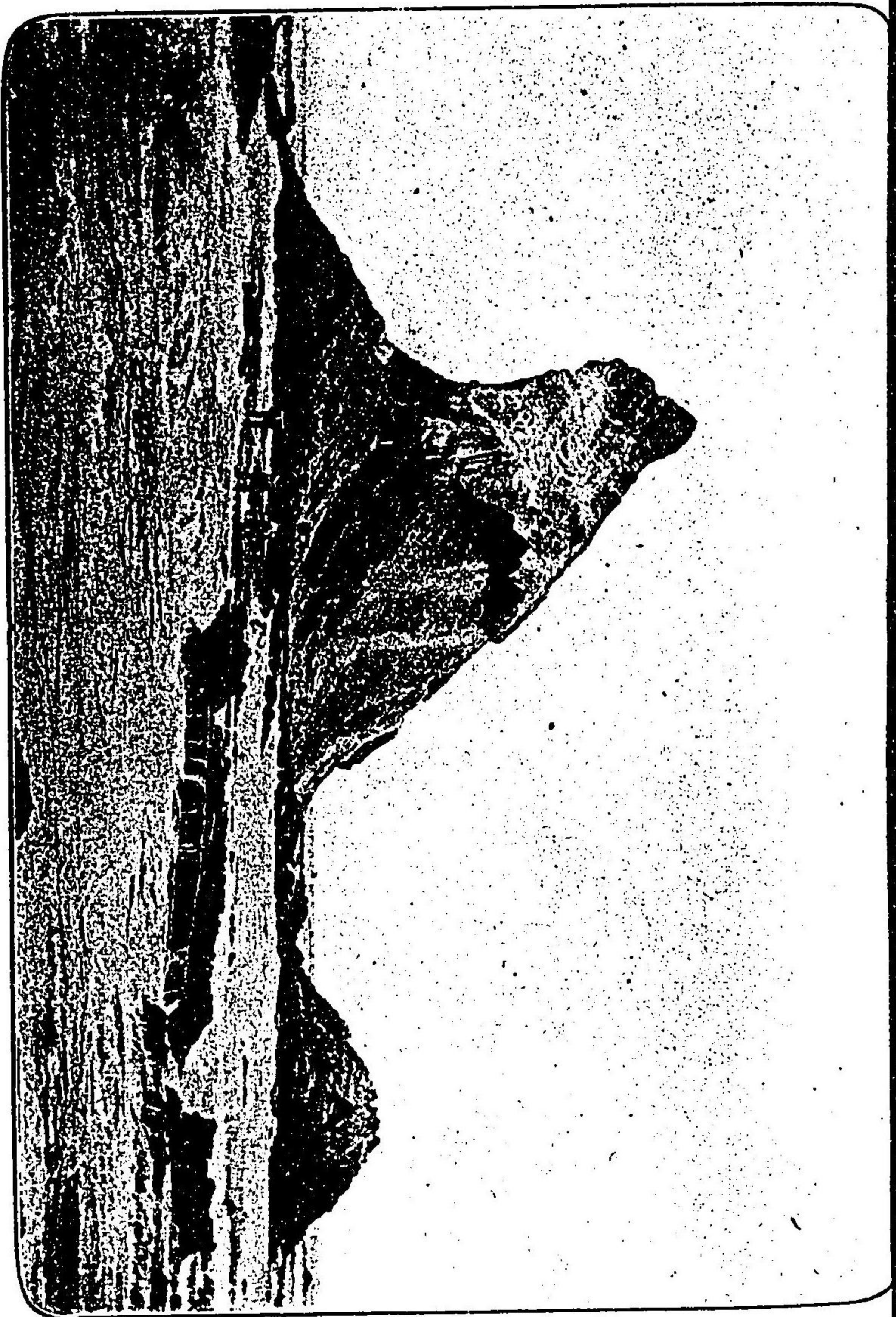
噴火雜



『六甲山動探檢記』參照

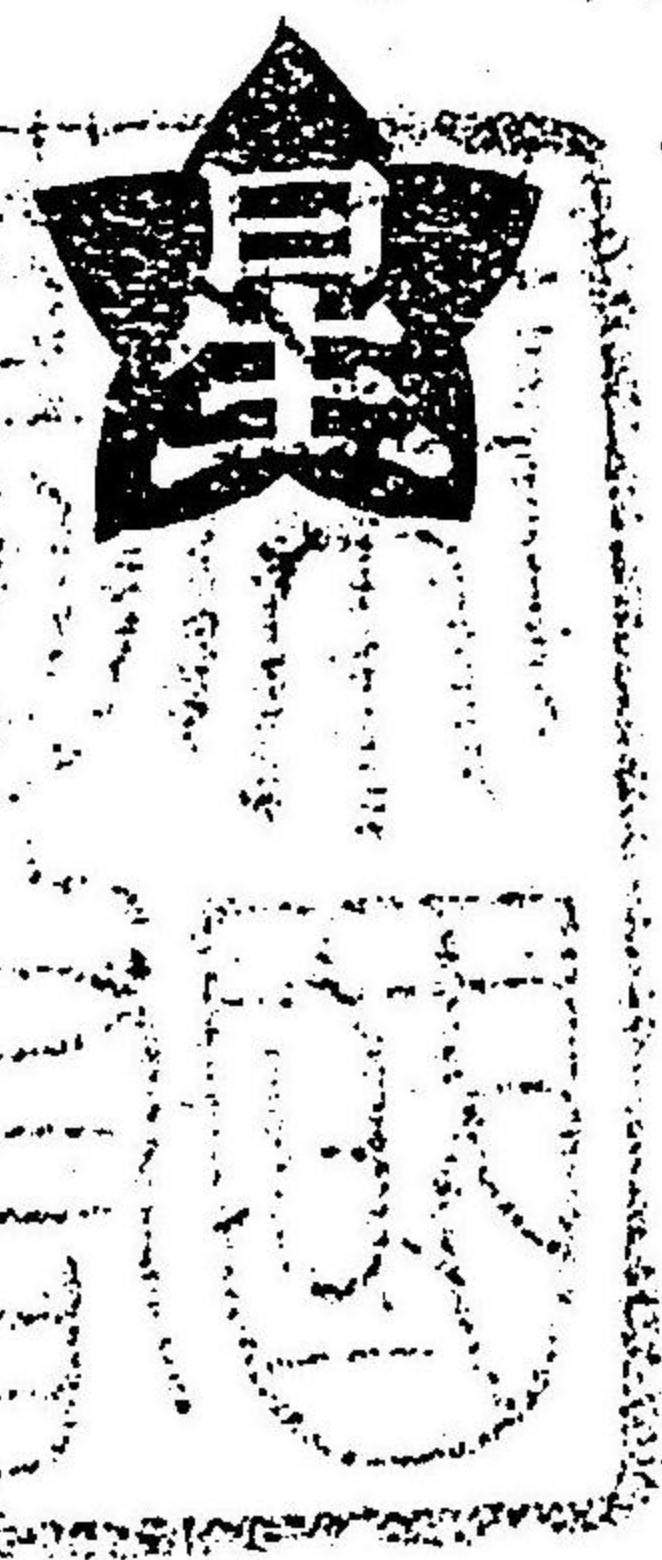


是 何 人



小川一眞製版印刷

『地』島探檢『記』參照



演劇脚本

源 朝 賴

○序幕 伊藤館奥庭の場

本舞臺一面の平舞臺、正面述べ下げて九尺藁葺の四阿、三方吹抜き、丸木の柱、これに花の咲きたる藤蔓をからまし。この前に誂への床几あり。

五 見 水 蔭

後庭中の遠見。上下花壇。左右柴垣にて見切り、此間出這入り有り。好
き處に若葉の楓、其他樹木、庭石などよろしく、都て伊藤館奥庭の模様。
茲に下部四人×、△、□、○各掃除をして居る。此見得唄の切れにて幕明
く。

ト迹賑やかなる合方彈流しにて。

× 「いや、誠に腰の骨が折れる様だ、暫らく入道殿の御留守を幸ひ、濟
まぬ事とは知りながら、人目に付かぬ隅の方は、手を抜いて捨て置い
たので、立派な御庭もめッさり荒果て。

△ 「今日御歸國と言ふ事が、前から知れて居りさへすれば、斯んなに狼
狽も仕まい物、俄に掃除に掛つたので、骨の折れるのはこれは道理だ。

□ 「今まで樂を仕た代りに、斯んな苦しい目に逢ふと言ふのも、これが
所謂因果觀面、それだから言はぬ事ではない、不斷眞面目にして居れ
ば、正かの際には大威張だ。

○ 「それから思ふと油斷と言ふ奴は、豪氣に骨の折れる物だ○其油斷で
思出したが、當國伊豆に流されて御座らッしやる、兵衛佐とやら言ふ
御方は、顔立と言ひ身の舉動、中々油斷は成らぬ様だの。

× 「何さそれが大違ひで、色の生白いのを楯にして、女軍の方へ切込
ひのは、人並はづれて素早い、倒れた源氏の家を起し、親兄弟の耻辱
を雪ぎ、一旗擧ると言ふ様な、立派な考へは無いさうだ。

○ 「いや和主の言ふのが大違ひ、油斷の出來ぬと言つたのは、矢張其女
軍の事さ。

△ 「これは飛んだ的はづれ、盲人が犬追物をする様だ。然し其事なら言
ふだけ管だ。和主は新參で知るまいが、打續いて御用が多く、入道殿
が都の方へ度々お上りの留守事に、三の姫君と佐殿と、ちやんと約
束が出來て居るのだ。

□ 「またくそれ計りではない、御二人の中に、千鶴丸と云ふ、可愛い

○ 若が出来て居るのだ。

○ 『扱も素早い兵衛佐、成程それを知らずに居たのは、全く我の油断ぢやわえ。』

× 『和主の油断は仕方もないが、彼の喧ましい入道殿すら、未だ知らずに居られるさうだ。』

△ 『新内の知らぬのも油断なら、入道殿の知らぬのも亦油断。』

□ 『なぞ、話に實が入って、掃除を止めたも此方の油断。』

○ 『御歸館のない其内に、彼方の庭を大急ぎで。』

× 『又もや掃除と出掛けやうか。』

三人 『それがよい、それがよい。』

ト四人上手へ這入る。迹合方變りて、柴垣の影より、安達藤九郎盛長、鳥帽子、半素袍、大小、好みの拵へにて出で。ちツと下部の行衛を見送り。

盛 『あれなる木立に身を潜め、立聴き爲すとも知らずして、上の噂を下部等が、我知り顔の高話し、誠に口のさがなき奴等ぢや。左りながら、彼の一事を、未だ人道の知らぬは幸ひ。なほ此上にも怠らず、萬事に心を配るであらう。』

トよろしく思入ある。此所へ上手の柴垣の影より、乳母園生、下げ髪、古代の衣裳、好みの拵へにて出來り。

盛 園 『それにお出なされますは、盛長殿で御座りまするか。』

園 『誰かと思へば園生殿、これは好い所でお目に掛った。是非とも貴女に御意得たく、お庭づたひに参りし處、折好くこれに來合せられ、こりや願うてもない首尾で御座る。』

園 『此方よりもお目に掛り、種々御話し申さねば、成らぬ事が出來ましたれど、今日に限って若君が、妾の傍を離れ給はず、漸くの事で御守の役を、侍女衆にお頼み申し、只今これまで参りました。』

盛

「何は然れ此わたり、心置くべき人もなし、幸ひ後に床もあれば、暫時これにて用事の趣き。」

盛

「承ッたり、申したり。」

盛

「どくと談合、致すで御座らう。」

盛

ト二人床几に腰を掛ける。

「して某に御用とは、如何なる儀にや貴女より仔細をこれにて申されよ。」

盛

「左様なれば此方より、お先さへ申すで御座りませう。」

盛

ト台方さッぱりと成り。

盛

「餘の儀にても御座りませぬ、早や御承知の事と存じますれど、入道様には今日あたり、都から俄の御歸國。それに就いて心ならぬは、彼の御二人の御身の上、御留守と違ひこれからは、思ふ様に御首尾も出来ず、北の方の御情けにて、今日までは何事も、どうやら知れず済

盛

みましたれど、御目敏さ入道様の事なれば、何時まで知らずにお出があらう。怒い隠立致さうより、可愛い御孫もある事なれば、これを一つの申立に、何も彼も打明けて、表面からおゆるし受け、晴れて御添ひなされては、如何な物かと妾の考へ、貴郎は何とお思ひあそばす。

盛

「某事も入道殿の、御歸國あると承はり、其儀に就きて参りしなるが如何にも貴女のおほせの通り、忍ぶは難く顯はるゝは、易しと申す世の諺。露顯に及ばぬ其前に、入道殿に申さるゝとは、一應御道理の次第なれど、これや逆も入道殿には、御不承知と存じられるて。」

盛

「さア只一筋に申上ては、嘸ど御立腹と存じますれど、其所には可愛い御孫もあり、又北の方より此事を、入道様の御心に、落る様にお話し願へば、何事もなふお許容あらうと、妾は思うて居ますわいなア。」

盛

「さゝ其所が益々某には、危い物と存じられるて。」

盛

「なんとおほせ被成れまする。」

盛

これより誂への合方に成り。

『されば、刹利も首陀も一樣に、我子を愛せぬ者はなく、況や孫に至りては、子よりも倍さると承はれど、此所が一つの考へ處。元來祐親入道は、源氏譜代の家人なれど、今は平氏の重恩受け、當國伊豆に並ぶ者なく、權威盛んの人なるに、流人の佐殿を、最愛しき姫の婿と爲しなば、これを平氏の嫌忌に觸れ、惹きては罪を子孫に及ぼし、領地は殊更家をまで、失ふ様に成るやも知れず。此所を思うて迂濶には、得心せぬ事必定なり。又た入道殿の氣質にても、大概様子は分り居れば、此儀は思ひ留まられよ。』

園

『貴郎のおほせも一通り、御道理には御座りますれど、それは此様に成らぬ前の、御所存では御座んせぬか。今の様に成りました上からは假令一たん御不承知にて、御腹立に成らうとも、入道様とて鬼ではなし、今更何んともなされますまい。』

盛

ト立派に言切る、これにて盛長氣を變へ。

『いや段々と承はり、盛長納得が参りました。その儀に就きてはなほ此上、種々御協議申した上、更に手筈を定め申さん。先づ差當つて此方より、申上るは別儀にあらず、入道殿の御歸館なき内、佐殿には例度の如く、姫君にお逢ひなされ、直々に何彼と、御密談なされ度く、其先觸に某が、これまで参りし次第なれば、例によりて園生殿よろしく御手引被下れたし。』

園 盛 園 盛 園

『それは心得て居ります。して御密談とは如何なる事を。』

『さ其密談とは○某とても存せぬを、さしたる事でも御座るまい。』

『何は兎もあれ此由を、少しも早う姫君へ。』

『我も主君に言上なし、又もやこれまで参るで御座らう。』

ト兩人床几を離れ。

『只今申せし彼の事は、なほ御思案あそばして、御心づきのありし上、』

盛 何卒少しも御隔絶なく。

「それも今と相なつては、無益の〇いやなに、いづれ拙者の智慧なれば、申すも無益と存ずれど、心づきなば其折に、腹藏なく申すで御座らう。」

園 「左様なれば盛長殿。」

盛 「園生殿。」

園 「後程お目に。」

兩人 「掛りましやう。」

ト唄に成り、兩人摺袂よろしく、盛長下手へ這入る。園生遣りて迹を見送り。

園 「様子あり氣な言葉のはしく、佐殿より直々にて、姫にお話なされるときは、如何なる事か心元なし、何は兎もあれ此由を、おしらせ申しに、参らうか。」

ト此時上手にで。

千鶴 「乳母はいづれに参りしぞ、乳母、乳母。」

竹生 「園生殿、若君が先程より、御尋ねのそばしで。」

侍女 「お出ぢやわいなア。」

園 「あのお聲は、若君様。」

ト詔への鳴物にて、上手より一子千鶴丸、若君好みの拵へにて、篋の竹馬に跨ぎ走出る。迹より女房、竹生、下げ髪鬘好みの拵へにて、服紗にて脇差を持ち、同じく侍女梅香、露野、小菊、雪江、下げ髪鬘、好みの拵へにて附いて出る。

千 「や、乳母は此所に居やツたか。」

ト竹馬を捨て、園生の傍に行かうとする、これを留めて。

園 「是は仕たり若君には、先々是にお掛けあそばせ。」

トこれにて合方に成り、千鶴丸上手の床几に掛ける、竹生其他皆

皆宜敷くかける。

竹 「先程まで若君には、競馬の真似事あそばし、殊の他に御機嫌好く、妾達が御對手にて、暫らく御遊びなされましたが。

「ふとした事から御意をそこね、園生をこれへ呼べとの御言葉。

「此をさまりは着きかねて、其所の御局、此所の御廊下。

「あちらこちらとお尋ね申せど、影も姿もお見えなされず。

「それ故若君の御供を致し、此御庭まで参りし處。

「折好く此所でお目に掛り、漸く安堵。

四人 「仕ましたわいなア。

「それは誠に皆様へ、御心配を掛けまして、済まぬ事で御座んした。

しかし若君には、只今まで、別におむづかりも被遊れず、皆の者を御

相手に、よくぞ御遊びなされました。こりや母君に申上げて、御褒美

と致しましやう。

千 「これ、乳母、其方は此所で何して居やツた。

その「乳母は只今此所で〇おう、それく、これなる藤の花盛り、あまり

見事に咲きましたれば、ツイ見惚れて居りました。

「園生殿のおツしやる通り、空より懸る藤浪の、落ちて音無き由縁の

色。

梅 「風にも散らず、雨にもさめず、障らば觸る紫の。

「雲かとも見つ、霞とも、見まがふばかり咲とるひ。

「常盤の松を餘所にして、此四阿に纏ふた様は。

「花壇の花の紅と、いづれを見ても見劣りなく。

「又一しほで。

四人 「御座んすなア。

「當御館の名にちなみ、藤の盛りと言ふ事は、これぞ館を祝ふ言の葉。

それにつけても儘ならぬは、世に捨てられし笹龍膽。

ト千鶴丸が捨てたる竹馬の篋を見てちつと思入れ、一寸氣を變へて。

竹 「して妾でなくば成らぬとは、如何なる事で御座んすな。

竹 「それは斯様に御座りまする。

ト合方きさつぱりと成り。

竹 「競馬の眞似事にて、暫らくお遊びなされし末、ふとした事の起りから、軍事を仕て見様、如何なる物か仕て見せよと、たつて御所望をばせど、餘の儀と違ひ此事は、女に出来ぬ荒くれ遊び、平に御免を願ひたれど、いやぢや〜と御意をばし、果ては園生を呼んで來い、乳母でなければ成らぬとおほせ、委細は斯様で御坐んすわいなア。

トきさつぱりと言ふ、園生此内思入あつて。

園 「流石は源氏の血統を、お受けなされし甲斐のつて、二葉ながらに香しく、蛇は一寸の比喩に洩れず、能くぞ左様におほせなされました。

女ながらも此園生、軍事の御相手を、致しまするで御座りませう。

ト少しく進み出で。

その「若君御免。

そのトづか〜と寄つて、千鶴丸の襟首を押へ、打擲よろしく。

「無禮はお許しあそばしませ。

トさつと見得、皆々驚き、さつと成る。千鶴丸痛き仕打あつて。

「これ、乳母、何んとするのぢや、痛い〜、痛いわいなア。

「こりや狼藉なり園生殿。

「何故あつて若君を。

露 「無禮な打擲。

皆々 「なされまする。

竹 「これから後は、若君と、申す事は成りませぬぞ。

「すりや何故に若君とは

梅 「申す事が。」

園 「成りませぬ。」

「成らぬと言ふ其仔細を、只今これにて申しますれば、千鶴君にも一通り、お聞きなされて被下りませ。」

園

「思入わつて言ふ。誂への合方に成り、皆々元の所になはる。」

「今改めて申さずとも、これは御承知と存じまするが、此五六年が其間、都方に御用が繁く、入道様には御館に、御住居あるは稀にして、殊に此三歳の程は、大番とやらの御役目にて、一度も御歸りなかりし故、事を隠すに都合が好く、今まで知れずに濟みましたれど、千鶴君も今歳はお五歳、これから先きの長い間、如何なる事にて入道様の御目に觸れぬとも申されず、其時いつもの口癖にて、若君様と御呼び申さば、それこそ君の一大事、今まで包みし其仔細が、遺らず露顯に及ぶ旨義、好し方々はお謹しみなさるゝとも、未だ何事も御合點なき

竹

「若君の事なれば、何心なく母上と、おほせなさるや計られず。さりながら其内には、北の方のお取りなしにて、晴れて御名乗もあらうけれど、先づそれまでは日蔭の御身体、それ故今から種々と、心をいためる妾が胸中、御察しなされて被下りませ。」

「其事ならば妾達も、よく心得て居りまするが、唯それだけをおツしやる爲め、軍事に事寄せて、勿躰なくも若君を、打擲なされし御心は、如何なる故で御座んすな。」

ト問ひかける、園生は是非なき仕打あつて、氣を變へ。しめりたる合方に成り。

園

「もをし千鶴君、軍に敗北なされた時は、彼の様な目にお逢ひなされ、それは、敗北程、痛い物は御座りませぬ。未だ痛いのはそのみならず、今度御歸國あそばします、入道様と申す御方は、見るから恐しい御方にて、萬一御兩親の事をお呼びなさるに、母上、父上など、お

ツしやる時は、其入道様が赫ツと御腹立あそばして、只今よりなほも倍して、痛い目にお逢はしなされば、必ずく父上や、母上を御覽あるとも、知らぬ顔を遊ばして、一口も物おツしやりまするな。

千

「それではもう父上とも、母上とも言はぬく。」
「それは誠にお賢い事で御座り升る。かへすくも御両親を、知らぬ顔に餘所にして、何一口もおツしやりまするな。」

業

ト皆々憂ひの仕打ある。此時向ふより侍女葉櫻出來り。
「若君を始めとして、皆様これに御座んしたか、只今これに眞砂御前、お庭づたひにお出で、御座りまする。」

竹

「何北の方がお出あそばすと。」
「お席を設けて妾達も。」

園

「お待申すで。」
「御座りませう。」

ト千鶴丸初め皆々宜敷く並ぶ。詠への唄に成り、向ふより眞砂御前、下げ髪、古代模様の小袖、小うち衣、御臺の拵へにて出で、迹に侍女四人附いて出來り、花道に留る。

眞

「今日我君のお歸りとして、上下共に忙がしく、混雑なせる其中を、花壇の花に浮かされて、庭づたひに來て見れば、此の四邊は又た一しは、見事に咲いた事ではある。」

園

「御前様にはよくぞお出あそばしました。花を褥のこれなる四阿。」
「いざ先づあれへ。」

竹

トこれにて眞砂御前、侍女、舞臺に來り、眞砂御前は正面の四阿に掛ける、千鶴丸も其脇に掛ける、皆々よろしく床几に掛ける。合

眞

「千鶴殿にはさつう音無しく成られましたな。」

千鶴丸、園生の顔を見て、返事をしてよいかと仕打にて聴く、園生中に在りて氣を揉み、どい仕打にて言へど教へる。

千 祖母様にはようお出なされました。

千 これは好い御挨拶、皆の者と共々に、御花見を成されたか。

千 あい、御花見を致しました。

真 眞砂思入あつて。

真 園生が此所に居やるは幸ひ、其方にちと密々にて、申す事があるわ

の。

園 妾よりも御前様に、お願ひの儀が御座りまする。

真 「それは何より好い都合、此話の濟むそれまで、千鶴殿の御供をして、

竹 竹生を初め侍女達は、彼方の庭を廻つて來や。

竹 「かしこまりました。

園 「左様なれば君の御保女を、よろしく御依頼申しまする。

竹 「それは承知致しました○千鶴君には先づ。

皆々 「お出あそばしませ。

園 ト唄に成り、竹生附添ひ、千鶴丸挨拶ありて、皆々従ひ、上手に這

入る、迹見送りて。

園 「して妾に密々にて、お話あるとは如何なる事か、何卒おほせ聴け被

下りませ。

真 「それにては隔てあり、遠慮に及ばぬ近う來や。

園 「左様なれば。

真 ト立上る。眞砂御前は座を進める。これを道具替りの知らせ。

園 「御免あそばしませ。

真 ト互に近寄る、密談の模様よろしく、時の鐘にて、此道具廻る。

○序幕 同奥殿の場

本舞臺三間の間、中足の二重、折廻して檜皮葺の庇椽側、真中に階段、一面御簾を下り。上の方一間奥へ下げて續き屋体、庇、椽側、同斷、一面に御簾を下り。サツと上手遣戸にて見切り。下の方椽側の突當りに白木の開き戸、出這入りあり。下手網代垣にて見切り。平舞臺所々に山吹の花盛りの模様よろしく、都て伊藤館奥殿の体。台方にて道具留る。

ト直ぐに下座の獨吟に成り。

唄 きのふ今日。八重山吹は咲きそめて。暮行く春を又此所に。留めて離の内と外。かりの宿りのしばしとて。逢へば嬉しき花の縁。

トこれにて三方の御簾を一度に捲上る。

正面一面に草花を畫きたる襖。黒棚など飾り附けよろしく。茲に右兵衛佐頼朝、烏帽子、狩衣好みの拵へにて立かゝり居る。祐親の三女辰姫、下げ髪の鬘、古代好みの衣裳にて頼朝の太刀を袖に隠し、よろしく下に居る。

唄 しのぶとすれど。香に知れて。夢結ばれぬはかなさや。心も空に狂ふ蝶。

ト頼朝は太刀を取らうとする、辰姫は渡すまいとする、これを枷にしてよろしく振ある。

頼 「先程も申せし通り、平氏の榮ゆる今の世に、晴れて添はれぬ日陰の身の上。いつまで罪を重ねんより、入道殿の歸館を限り、涸れ盡したる源の、此頼朝は思切り、今までちぎりし言の葉は、水と流して被下れよ。

辰 「つれなき君の御言葉かな、鄙に育らし吾妻菊、色香少き妾なれば、君の御側にはべらうとは、さらし思つて居りませぬと、あの餘所に咲く仇花に。

ト口こもり、ぢつと下を向く。

頼 「何、餘所に咲く仇花とは。

辰

「餘所の花とは、それ、何處ぞに、な。」

辰

「はていづれに花が咲いて居る。」

辰

「それ何處やらで、トはづかしき仕打あつて、」

辰

「御座んすわいなア。」

辰

「それは御身の廻り氣と言ふ物ぞや。あの北條の小四郎は、心ある武士故、それで折節参りはすれど、何の其様な事がある物ぞ。」

辰

「餘所の花と申してさへ、おさとりあそばす貴郎の御心、なんで妾が疑ひませう。」

辰

ト少しくすねたる仕打。

辰

「はて扱てこれは迷惑な。」

辰

唄へ落ちて亂れて水の面。互ひに憂さを三津山の。其かつら子が怨みさへ。今は我身に引くらべ。

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

辰

ト頼朝迷惑の仕打。辰姫口惜しき思入にてよろしく振ある。

「いえく妻の思ふ通りで御座んすわいなア。」

「其言譯は今せずとも、盛長や園生がして呉れやう。されど其様な事は、迹形もないつくり事なれば、あらぬ噂に胸を痛め、いつもの病氣起し給ふな。」

唄へ散らす嵐ぞつれなしと。夕の露に袖濡れて。をるにはつらき井手の里。

ト此内辰姫は泣伏す。頼朝は種々いたはる。

「これはと言つても聽分なくば〇それよいつまで此所に居るとも盡さまじ、さらば此儘別れやうか。」

ト太刀を取上げて立上る、辰姫は袖を引きて留る、これを拂うて階段の所まで行く。此前より下手山吹の陰より以前の園生。里の童の拵へに成りたる千鶴丸の手を引きて、様子を窺うて居る。

唄へ 留める乗手に留る駒。戀の手綱の染分は。いづれ白やらゆかりや

此内辰姫もあらはには留めかねて、只下を向いて悲しき思入。頼朝も未練を遺して行きかね、階段の處にて躊躇する。乳母は千鶴丸に父上を留めよと仕打にて教へる、千鶴丸はかけより頼朝に縋る。頼朝は驚きたる仕打。千鶴丸は父上と呼び得ぬ思入れ。ト、千鶴丸を抱き頭を撫でくやりながら。

頼 「これ、此様な可愛き者が、二人の中にあるではないか、如何でか餘所に増花を、ながめてこれが濟むものぞ。

辰 「可愛い者がある事を、御存じでありながら、今更思ひ切れいとは、まことつれなき君の御心。

頼 「其所が是非なき浮世ぢやわえ。
ト思切ツて行きかける、千鶴侍衣の袖を引きて上手に連行き、蝶々

を取ツて呉れと言ふ仕打。此内辰姫、園生、共に好く留めたと喜ぶ、頼朝迷惑なる仕打。

唄へ うつしてぞ見ん狩衣の。色はづかしき一枝は。誰のかざしに贈るらむ。

ト唄切れる、迹風の音に成り、さし金の蝶々二つ、花のはどりに舞ふ。合方に成り、皆々これに目をつける。

辰 「春を尋ねて飛ぶ蝶の、興ありげなる戯れ様。
「胡蝶ですら其様に、睦まじさうに舞ふ物を、何をいさくさわをばします。

頼 ト園生植込より出る。
「時を得顔に揚羽の蝶々、好ましからぬ紋所、蝶を見てさへ、無念なるぞ。

トよろしく口惜しき思入、一寸氣を變へて。

頼

「これ千鶴、此蝶々を取りたいか。」

頼

ト思入にて言ふ。千鶴丸は只顔を見上げて何とも言はぬ。

頼

「見れば衣裳も常と違ひ、里の童と同じ拵へ、これには何か仔細があらう。」

園

「何故其様に仕やツたか。」

園

「それは斯様に御座りまする、入道様のお歸りに、早や間近う成りましたれば、今までなされた若君の、姿を隠す里の童、お忍びあそばす其ために、御衣服をかへました。」

頼

「それは好い所へ氣がつかしました。」

頼

「我故總じて人々に、苦勞を掛けて氣の毒なるぞ。」

竹

ト皆々ホロリと成る。早めたる合方ばたくにて、向ふより以前の竹生出で、直ぐ本舞臺に來り。

竹

「いづれも様、一大事に御座りまする。」

頼

「何と申す、一大事が。」

頼

「起りしどな。」

園

「入道様先程御安着あらせられ、未だ御休息もあそばさぬに、姫は如何致せしか、出迎せぬは訝し、と、妾におたづねあそばしました故、

園

今朝程より御不例と、其場を繕ひ申上げしに、然らば早速見舞ふ程に、

園

其方此由傳へよと、おほせつけに御座りまする。」

頼

「すりや父上には妾の見舞に。」

園

「此奥殿へ参らるゝとか。」

園

「こりや如何様に致してよいやら。」

園

「成りましたなア。」

園

「少しも騒ぐに及ばぬ事、我はあれなる植込みに、しばし姿を潜むれば。」

頼

「何と申す、一大事が。」

園

「起りしどな。」

園

「入道様先程御安着あらせられ、未だ御休息もあそばさぬに、姫は如何致せしか、出迎せぬは訝し、と、妾におたづねあそばしました故、

園

今朝程より御不例と、其場を繕ひ申上げしに、然らば早速見舞ふ程に、

園

其方此由傳へよと、おほせつけに御座りまする。」

頼

「すりや父上には妾の見舞に。」

園

「此奥殿へ参らるゝとか。」

園

「こりや如何様に致してよいやら。」

園

「成りましたなア。」

園

「少しも騒ぐに及ばぬ事、我はあれなる植込みに、しばし姿を潜むれば。」

園

「千鶴君は妾と共々、あの山吹の影へなりと、忍ぶ事に致しましやう。」

「妾は何んとしたら好い事か、身が震へて成らぬわいなア。」

「先づ姫君には奥の間へ、妾が御供致しましやう。」

「悟られぬ様致すが肝心、少しも早く。」

辰 竹 頼 園

「お出あそばせ。」

頼朝は上手。辰姫には竹生附添ひ、襖を明けて這入る。園生は千鶴丸を連れて下手に忍ぶ。風の音にて蝶々を引く。迹床の淨瑠璃に成る。

上へ 姫に都の土産は。花織錦をそれならで。親が自儘に結びたる。赤繩

の披露。泉裁を。めぐりて来る。入道祐親。

ト向ふより祐親入道、坊主鬘、旅装束好みの拵へにて出る。迹より子役の太刀持、一人、近臣海江田源六季宗、山内権九郎時實、鳥

帽子、素袍、附太刀、好みの拵へにて出で、花道へ留る。奥より

竹生侍女二人附添ひ、襖を明けて出で、椽側に出迎へる。

「久々にての歸館なれば、我家の庭も珍らしく、餘人の屋敷に参つた

様ぢや○道理や出立の其砌、手づから植ゑたる小松さへ、我丈よりも

高く成り、最早や根抜きには致されぬわえ。

「御意の通り枝葉も繁り、君の御壽命諸共に、幾千代かけて榮ゆるで

御坐りませう。」

時 「これを祝うていづれよりか、鶴が毎日舞下り、今に巢をかける様に

相成りませう。」

祐 「つまらぬ諛辭を申す奴かな○何は然れ辰姫には、永らく遇はで過し

たるに、病氣と聴きては猶更なり。一時も早く見舞ふか。

ト調べにて本舞臺に来る。侍女は脇息、敷物などを上手好き所に置き、座を設けて這入る。祐親は直ぐ二重に上りて座に住ふ。太刀

祐

「久々にての歸館なれば、我家の庭も珍らしく、餘人の屋敷に参つた

様ぢや○道理や出立の其砌、手づから植ゑたる小松さへ、我丈よりも

高く成り、最早や根抜きには致されぬわえ。

「御意の通り枝葉も繁り、君の御壽命諸共に、幾千代かけて榮ゆるで

御坐りませう。」

時 「これを祝うていづれよりか、鶴が毎日舞下り、今に巢をかける様に

相成りませう。」

祐 「つまらぬ諛辭を申す奴かな○何は然れ辰姫には、永らく遇はで過し

たるに、病氣と聴きては猶更なり。一時も早く見舞ふか。

ト調べにて本舞臺に来る。侍女は脇息、敷物などを上手好き所に置き、座を設けて這入る。祐親は直ぐ二重に上りて座に住ふ。太刀

竹

持附添ふ。季宗、時實は下に居る。竹生下手に住ふ。
「お詞に従ひお先さへ参り、姫君にお報知申しましたれば、殊の他御喜びあそばし、久々にての御目もとじて、御寝の儘にては恐れ多しと、只今これへ御出に御座りまする。」

祐

「押して病床を離れては、春とは言へど外の風、肌障りて宜敷かるまじ。我より行かむ、案内せよ。」

上へ脇息後に搔遣れば。早やしづくと立出る。姫の姿を入道は。見るより又も居なほりて。

祐

祐親脇息を後に遣り、立ちかゝる。此時襖を明けて辰姫、以前の侍女に助けられて出で、よろしく住ふ。これにて祐親座になほる。

辰

「お、姫か。今此方より参らうと思ひ居りしぞ。
「父上には大番の御役目も、滞りなく濟し給ひ、都より長の旅路も、恙なく御歸りあそばし、未だ御休息もあそばさぬに、妾を思つて御見

舞ひ被下れ恐多ふ存じまする。
「今もこれにて申せしなるが、無理を致して起出なば、後の崇りの恐ろし。大事に保養致すがよいぞ。
上へ子には優しき親心。子として親をあざむくは。忍ぶ戀とて是非もなし。」

竹

ト辰姫答へかねる仕打、竹生氣を揉む思入あつて。

「いつもの御持病に御坐りますれば、御床の中にお出あるより、此御廣間にお出ましあそばすのも、却つて御氣晴に成りまして、お爲によろしいかと存じまする。」

祐

「實に竹生の申すのも道理ぢや。〇扱それはそれと致しおいて、折角都より持歸れる、心盡の土産も、病氣とあつては是非ない事ぢや。本復致す其時まで。
ト思入あつて。」

竹 祐

「見せる事は延すであらう。」

「お土産とは何で御坐りましやうな、錦が綾か但しは鏡か、それをお
樂しみになされまして、早う御本復あそばしませ。」

上ハ 鷺を鳥の口前に。白黒眼季宗時實。

ト 兩人辰姫の様子を見て、これは怪しいと言ふ思入れ。

季 「姫君には御病氣とて、御出迎にもおこしなき故、餘程の御大患と存
せしに。」

時 「御顔の艶も常に變らず、御機嫌の能き体を拜し。」

季 「先は恐悦に。」

兩人 「御坐るての。」

上ハ 胸に一物二人が言葉。姫は思はず顔を上げ。

ト 辰姫むツとしたる思入れ。

辰 「長の旅路もお障りなう、御歸りなされし父上の、御顔を見ては病も

祐 權 源

祐

忘れ、喜ぶ色のあらはれて、寔が知れぬのであらうわいなア。

「不例と聽きて驚きしが、先々格別の事もなく、喜ばし氣なる顔を見

て、入道一時に氣がゆるみ、俄に疲勞をおぼえたり。又後程あらため

て、都の話をして、致しに参らう。

「左様なれば大殿には。」

「最早や御立で御坐りまするか。」

「廊下づたひに、参ると致さう。」

上ハ 立上りたる時しもあれ。蝶に心も上の空。稚心の包みかね。袖

振翳して追出る。こは死なしたりと辰姫が。そはつく様を見て取

る祐親。

ト 下手に以前の蝶々を出す、これを捕うとして千鶴丸、山吹の枝を

搔分けて顔を出す。敵役皆々キツと成る。女形皆々心配の思入。

「やアあれなる山吹の植込に、癖者潜むとおぼえたり。」

季 「何奴なるか引捕へ。」

時 「せりや一詮議。」

兩人 「致して呉ん。」

上へ 勢込んで兩人が。繁りの中に分入れば。今更何んと千鶴丸。園生

も共に引出され。

ト兩人 勢込んで下手に馳行き、季宗は千鶴丸、時實は園生を捕へ

好き處に引据ながら。

季 「手強き奴と思ひの他、一人は女房園生殿。」

時 「二人は見知らぬ村の童、何故彼處に。」

兩人 「隠れしよな。」

祐 「こりや待て兩人、多寡の知れたる女童を、荒々しく引捕へ、威猛

高に詮議呼はり、物は左様に致さずとも、優しくして分る事ぢや。

兩人 「へえい。」

上へ 腰を折られて力瘤。遣り方もなげに。控へける。

ト季宗、時實、不性無性に放して元の所に住ふ、千鶴丸は恐ろしき

仕打にて園生に縋る。

上へ 入道聲をやはらげて。

ト祐親思入あつて。

「こりや園生、其方にも久々の對面ぢやの。」

「御意に御座りまする。」

ト面目なき思入。

「久し振りにて遇ふ事なれば、逃隠れ致さずとも好い物を。此入道を

憶恐れ、山吹の陰にひそむとは、近頃胸慾な致方ぢやの。」

「いえ、左様な仔細では御坐りませぬ。」

「俄の御入りに身のたしなみ、取り亂したる姿なれば。」

「君の御目に觸れましたは、失禮と存じまして。」

祐 園 祐 竹 辰 園

るわいなア。

上へ呵るもつらし。呵られる。子を見る親の。又つらさ。繁りの中の

頼朝も。思はず露に。濡す袖。

ト園生よろしく千鶴丸を呵る。頼朝上手山吹の陰より様子を窺ひ、

不憫だと言ふ仕打、辰姫思入あつて。

「こりや園生、其様に呵りやんな○季宗や時實が、強らしい顔して睨

むだ故、それで憶氣たのであらうわいなア。

「如何にも姫の申す通り、最初に恐れを抱かしては、唄ひ得ぬ事道理

千萬○こりや其所な小わツば、遠慮はない近う参れ。今迄姫の伽を爲

し、能く慰めて呉れたる由。褒美として其方の、好める者は何なりと、

望みに委せて取らす程に、すつとこれへ上ツて来い。

「入道様のおほせなれば、早やちやツと御側に行きや。

「えいッきり〜と。

季 園

時 祐

「うせ居らう。

「はて、それが悪いのぢや○さ、さ、早く参れ、何も恐ろしい事はな

し、近う参れ、すつと来い。

「さアちやツと行きやいのう。

「はアい引。

上へ是非なく立つて入道の。側に近寄るをさな子を。氣遣ひながら見

送る頼朝。思はず知らず乗出せば。目敏き入道。それと見て。

ト千鶴丸恐る〜二重に上り。祐親の脇に住ふ。頼朝氣遣ひながら

とツと見送る。これにて祐親と顔見合せ、はツと驚きて隠れる。

祐親よろしく。思入直ぐ氣を變へ。

「扱も愛らしき童かな、去るにても不思議なるは、我知る人の面体に

似たとは思か、其人其儘。

辰 「すりや誰人の面体に。

園

「それなる童が。」

皆々

「似て居りまするな。」

祐

「右兵衛佐頼朝に、似たとは思か、其儘なるぞ。」

皆々

「なんとおッしやる。」

祐

ト皆々さつと成る。是より下座の合方に成り。

「我今平氏につかゆれども、素は源家重代の家人なり、家は當國にありながら、四五年の其間、大方内を外に爲し、音信もしみ／＼爲さざりしは、情けを知らぬに似たれども、束の間も忘れぬは、故郷の有様、主家の末路、姫は今頃如何に爲し居る、源氏の行衛は如何やと、思はぬ日、あらざるに、今日漸く歸國なし、姫を初め一同の、無事なる顔を見しのみか、佐殿の面体に生寫しなる童に遇ひ、そいろに昔の忍ばれて、心苦しき、事なるぞ。」

ト思入にて言ふ。

辰

「すりや父上には、此童を、なつかしくおぼしめすことな。」

「如何にも、他人とは思はれぬゆゑ〇たとひ公けの用事繁く、閑暇無しとは言ひながら、一家の事を今日まで、打捨置きしは過まつたり。」

最早や姫にも此様な若のありてはづかしからず。我もこれなる童を、孫に持つても好い年輩。是より後は眞實の入道。家は祐清に譲りし上、天晴名ある武士を、其方の婿に仕たい物ぢや。

ト思入にて言ふ。辰姫は耻かしき仕打。園生思入あつて。

「そんならもしや夫れなる童が、姫の御子で御坐んしたら。」

「其時何んぞあそばします。」

「萬一亦たそれなる小わッばが、源氏の種で御坐つたら。」

「如何なされる御所存か。」

「承はりたう。」

「存じまする。」

園 季 竹 園

上へ問ひつめられて入道は。莞爾とばかり打は、えみ。

「源氏にもあれ、平氏にもあれ、天晴勇々しき丈夫ならば、何んの差別を致さうや。此れなる童が姫の子なら、改めて孫にする。」

上へ言切る途端。開戸を。せわしく明けて。真砂御前。

ト開戸を明けて以前の真砂御前出。

真 「其御言葉に違ひませぬか。」

ト思入あつて好き處に住む。

「毎上にはいつの間。」

「これへお出に。」

皆々 「御坐りました。」

「姫の病氣のさづかはしく、入道様の御迹より、廊下傳ひに彼處へ参り、今までの一部始終、残らず聴いて居りましたが、吾夫、今の御言葉は、たしかに相違御坐りませぬか。」

祐 「何、虚言を申さんや。」

「しかと左様で御坐りまするか。」

「二言はないわえ。」

「左様なれば改めて、此真砂が一つの御願ひ、御聽き被爲れては被下りませぬか。」

ト思入、祐親は無言にて點頭。

「他の事でも御坐んせぬ、これなる童と血筋の盃、あそばして被下りませ。」

トきつと言ふ。皆々思入ある。

「何を御隠し申しませう。これなる童は千鶴丸とて、佐殿と姫との中

の、初孫で御坐りまする。」

「村の童と申上、君をいつはりし罪諸共。」

「御免しなされて、姫君を、目出度く彼の頼朝様と、御娶合せあそば

す。

竹園

す様。

「妾を初め一同に、お願い。

「申上りまする。

ト女形皆々願ふ。姫は恥かしき仕打。入道は矢張無言。

「斯様な事であらうとは、思はぬでもなかつたが。

「いやはやお目出度い事で御座る。

兩人 「うはッはッはッはッ。

上へ 何思ひけん入道は。姫と若とを取つて伏せ。

ト入道辰姫と千鶴丸を左右に押へ。

「あの此所な不所存者め。

ト兩方に突のける。姫は泣伏す、竹生いたわる。千鶴は二重より駈

下るを、季宗引据える。園生氣遣ふ。時實これを留める。入道は

すかくと階段の處に行き、真砂をさへぎりてキツと見待。

祐

「かゝる事もありなにと、わざと垂れたる釣ばりを、知らずに呑みし魚の名の、鯉と言へるは親不孝、それにも増したる人非人、好くも耻辱を、與へしよな。

上へ 威猛高に呼はれば。

真

「不孝者には妾が仕ました、罪は此方にある物を、假令親がゆるさぬとて、源氏の正統佐殿を、婿に持つのが過まりか、武士に二言は無

祐

「黙れ、真砂。

祐

ト床の合方に成り。
「源氏の流人なるが故、平氏の權威に恐れを爲し、婿にせぬと思ふは非が事、佐殿天晴の丈夫ならば、願うてもなき好い縁組、如何に平氏の咎めを受け、問罪の使者來るとも、言ひこめて引返させ、好し又軍勢刃をつらね、弓矢の上にて詰り來るとも、伊東の一族引纏め、追拂

ひ、打散すは、此入道の胸にあり。されば源平藤橘あへて撰ばず。商人又は修業者たりとも、一癖ある丈夫ならば、嫁にも遣らん、婿ども爲さんとこそ申しつれ。

真

「それ故にこそ佐殿へ、差上やうと申せしに、御不承知とは合點參らず、其仔細おさかし被下りませ。」

祐

「清和源氏の正統にして、父は左馬頭義朝公、叔父には八郎爲朝あり、兄には悪源太義平と言ふ、剛の者ありながら、彼の頼朝の意久地なさ。源氏に取りては縁故深き、關東近く流されて、天より賜物を受けながら、更に奮起の心なく、再び白旗ひるがへして、亡父の無念を晴さんとは、露ばかりも思はぬ上、我々づれが娘に通じ、足手まどひの子を造つて、絆に引かれ、うかり、うかり、其所邊あたりに潜み居るとは、言語に絶した大腰抜け、斯る白痴に縁を組み、まさぞへ受くるは愚の至り、それ故我は不承知なるわ。」

上へ不承知なるはと言放たれ。茲に取着く島もなく。真砂を初め一同

に。顔見合せて言葉なし。此方の蔭には頼朝が。無念の涙はらく

く。腹に据かね。搔分けて。躍出んと思ひしかど。素は身の錆。

心の曇り。今此中に打出なば。耻辱の上の耻辱ぞ。堪忍ぶこそ

せつなけれ。

ト皆々是非なき仕打。頼朝上手の山吹を搔分て躍出で、入道を只一

刀に切らんとあせる仕打。思ひなほして我身の意久地勿りしを耻

ぢ、口惜しさうに控へる。

「斯くと知りたる其上は、最早や猶豫は致されぬ、最前申せし土産と

は、錦でもなく、鏡でもない、江間小次郎と言ふ立派な花婿。

「すりや父上には都にて。」

「江間小次郎に娘を遣らうと。」

「御約束を。」

真 辰 祐

女形

「なされましたか。」

季 「其御使者には、都にて、我々兩人参りたれば、次第逐一存じ居る

が。

時 「小次郎殿は立派な殿御、男ながらも恍惚致した、頼朝面の弱武者と

は。

季 「三國一の富士の山、其天べんの白雪と。

時 「熊野の山の山奥の、谷の度底で焼く炭程。

時 「たしかに相違。

時 「致して御坐るは。

眞 「たとへ父上の御詞なりとも、此事ばかりは従ひませぬ。

辰 「姫の言ふのが道理々々、子まで爲したる其中を、今更裂くとは胴慾

非道。

結 「何が胴慾非道なるぞ、子まで爲したる其中と、それを枷に申すに及

ばぬ、意久地なしの種ならば、矢ッ張同じ意久地なし、源氏の爲めに
爲らぬのみか、生し於ては平氏より、此入道が疑ひ受け、蛇蜂取らず
に相成故、一思ひに打殺し、未練の根葉を枯して呉れるは。

女形

「え、え、えッ。」

祐 「留立せぬ内早や兩人、それなる童を引立て、松川の奥なる白瀧の淵

へ、投込んで殺して仕舞へ。

季 「何んとおはせ被成まする、此れなる童を白瀧に。

時 「投込めよとおはせあるか。

祐 「如何にも流人の落胤、打殺しても苦しうないは。

季 「これはちとさついで御誑意。

時 「他に御思案は御坐りませぬか。

祐 「何んの思慮致さずとも、此様な事は分り切ッて居る事ぢや、躊躇致

さず急げ〜。

季時

「どうせ我等は悪まれ役、左様なれば直様是より。」

兩人

「御坐りまする。」

上「情け用捨も荒くれ男。泣入る若を引立て。行かんと爲すと。掻いぐぐり。」

ト季宗、時實、千鶴丸を引立て様とする。千鶴丸行くまいと逃げる事あり。

千

「乳母、私ア父上とも母上とも、最前から言ひはせぬに、此様な酷い目に逢ふと言ふは、こりや如何した事なるぞ。」

千

上「日頃優しき祖母様や。母様や。乳母も此所にありながら。」「入道とやら言ふ強らしい、老爺様に、私が呵られて居る物を、断り言ふて呉もせず。」

上「今まで知らぬ郎黨に。追立てられて恐ろしや。」

千

「私を連れて行く處は、如何なる處か知らねども、厭じや〜行くのは厭じや。」

上「厭じや〜と子心に。怨みうらはの片男浪。寄せてかへらぬ門出の。不憫や和歌の名所にも。蘆邊の鶴の親心。姫は持病のさしこみて。」

ト千鶴丸よろしく仕打ある。辰姫は癩のさしこみたる体、竹生はこれを抱する。真砂は祐親の袖に絶りて非道だと言ふ思入。園生は千鶴を助けやうとする。

「何も恐ろしい事も、強い事も御坐らぬわ。」

「白瀧と申す處は、誠に面白い處なれば。」

「犬ころ打の歌なりと、唄ひはやして賑々しく。」

「それ此竹馬にこう乗ッて。」

「かうやッて。」

季時季時季

時

兩人

「それ、白と黒とは西東。」

上「白と黒とは。西東。次郎と太郎とは。西東。」

ト兩人、厭がる千鶴丸を竹馬に跨がらせ。

「え、早く唄うて。」

「歩まれよ。」

「白と黒どが噛合うて〜〇乳母も一所に来てたもや。」

トすか〜と園生の側に近寄る、これを兩人隔てる。

「お供をせいで何んと仕ませう。」

ト園生立かゝるを、時實當身にて倒す。園生うツとりと成る。

「こりや乳母を。」

ト立戻るを季宗隔てよ。

「其迹は。」

季

千

園

千

季

時

千

「次郎と太郎どが打合うて〜。」

ト花道まで歩み、好き處にて振りかへり、心の遣る仕打。真砂、竹

生は氣を失ひたる辰姫を、入道に突きつけて、此通りに成りたる

程なれば、免してやれとなだめる仕打。入道無言ぢツと思入。

上「負けたる次郎は。西へ行く。西へ行く。」

竹真「すりや如何あつても。」

ト兩人うらめし氣に言ふ。

「くどい。」

ト大喝、これにて辰姫、園生、生氣復へり、きツと成る。頼朝もた

まrikaねて思はず山吹の枝を折る。

上「西の方には彌陀淨土。死に行くとは。白瀧の。麓をさして。」

ト千鶴丸を引立て、季宗、時實、向ふへ這入る、入道これを見送る、

頼朝憂ひの思入、辰姫、真砂。竹生、泣き伏す。園生迹を追はう

とする。此模様よろしく。時の鐘三重にて暮

○同返し 松川奥白瀧の場

○引付ると直に風の音の繋ぎにて引返す。

本舞臺一面岩山の道具幕。都て白瀧麓の体。茲に老婆田野木、洗濯盥を下に置きて、牛飼の童、柿太郎の胸倉を取つて居る、樵夫木邊二、山作、これを留めて居る。此模様よろしく山おろしにて幕明く。

田 「おぬしの様な悪戯者が、又と二人ある物か。前世は馬の尾に巢をくつた鼠でもあらうかい。

柿 「なアに牛の尻尾に飴を塗つて、蠅を取つた當時の智恵者だ。

田 「其口前が悪らしい。子供の瘡に年寄を、能くもく馬鹿に仕なさる、モウ勸忍がならぬ。

木 「これさ如何した物ぢや、日頃佛性の其方が、今日に限つて腹を立て、

山 黒塚の鬼婆が庖丁を取られた様に、大騒ぎを仕なさるのは。

田 「これはよくくの事であらう、全体間違の起りと言ふのは、如何した事か、あらましを、二人に話して聴かさつしやれ。

山 「聴いて被下れ、斯言ふ仔細ぢや。お前達も知つての通り、毎日此谷川で、洗濯するのが妾の仕事。それに此四五日前から、雨も降らぬに水が濁り、上の方から流れて来るのは、大きな桃かと思ひの他、草や木の葉や芥ばツかり。如何した事かと川上へ、上つて見たれば此頑童が、大きな牛を二三匹、水の中へ追込んで、其所邊を搔廻して居るのだもの、下の濁るのは道理さ。

木 「それは愈おぬしが悪い、これから後は必ずとも。

山 「悪戯をする事はならぬぞよ。

柿 「おつウ婆アの肩を持つて、此柿太郎をへコマせるな。

木 「白痴な事を言ふ餓鬼だ、何も肩を持つてへコマせるわけではない

山

木

山 田 柿

山 木

「婆様の洗濯の邪魔をするのは、好くないからさう言ふのだ。」

「田野木婆アが此川で、洗濯をすると言ふなら、我も牛の洗濯を爲るのだ、邪魔をするときかねえぞ。」

「口から先さへ産れた代りに、汝の様な悪戯者は、口から先さへ死ぬるであらう。」

「さうだ、牛の飼主の處へ連れて行き、呵ッて貰ふからさう思へ。」

「さうぞしッかりと頼む程に、早く連れて行ッて被下や。」

「飼主の處へ連れて行かれ、呵られるのは構はないが、さうする時は一日一晚、米飯を食ふのを留られて、大事な口が干上るから、夫ばツかりは厭ぢや〜、行くのは厭ぢや。」

「何を此奴が言ふ事か、え、さう〜と。」

「うせ居らう。」

柿 「爺と婆とは山と川〜○婆様も一所についてお出な」

田 「行かなくツて如何する物ぞ。」

ト盥を抱へて行きかける、柿太郎これを引くりかへす。道化たる合方になり、中より白布を引出し、白旗の心にてこれを枷にだんまりの見得、おどけたる立廻りありて、ト、四人下手へ這入る。知らせに付き道具幕切ッて落す。

本舞臺一面の平舞臺。サツと上手へ寄せて斜に二間常足の二重。古びたる辻堂、茅屋根、椽側付、石の階段、正面木連絡子、開閉あり。下手波布を懸けたる大瀧。絶間なく落る仕掛あり。此下瀧壺の心にて波布を敷き、切穴あり。此四邊岩組よろしく。向ふ一面岩山の張物、諸所に杉の立木、上下杉の林にて見切り、日覆より杉の釣枝を下し、都て松川奥白瀧の体。

ト直に床の淨瑠璃に成る。

上 伊豆の山。松川奥の瀧津瀬は。巖を砕くのみならず。人の命をうたかたの。泡と消え行く千鶴丸。小脇に搔込季宗が。一散走りに駈來る。

ト水の音劇しく、ばた／＼にて、向ふより前幕の海江田源六季宗、千鶴丸を小脇に抱へながら走り出る。迹より郎等二人附いて出る、直ぐ本舞臺に來り、好き處にて留り思入あつて。

「路次を急ぎし甲斐あつて、暮れざる内に瀧の下まで、漸く到着致したが、イヤ誠に手足が折れるやうだ。」

「何は然れ瀧見堂にて。」

「暫時御休息なされませ。」

「途中ではぐれし時實の、追付き來るまで待つと致さう。」

ト辻堂の椽側に千鶴丸を下し、季宗も腰を掛ける。郎等二人下に佳ふ。

季

「こりや千鶴殿、さぞ窮屈で御座つたらう、此所まで來れば大丈夫、

千

先づくつろいで御休みなされ。

千

「此所は何と言ふ處か、私ア恐ろしうてならぬ故、早く屋形へ歸りた

季

いわいなア。

千

「只今お連申す程に、暫らく此所でお待ちなされ。」

千

「乳母は如何して居やる、園生は此所へ何故來ぬのぢや。」

千

「今に迹から参りますれば兎に角お待ちなされと言ふに。」

千

「厭ぢや、乳母やい乳母やわい。」

上

「呼ぶ其聲も訝に響き、胸にこたへて季宗が。彼も人なり。鬼の目

季

こ。浮む涙をまぎらして。

季

ト千鶴丸立ッて花道の方へ行とかけ、季宗これと追ひながら。

季

「はてさて聽分けのない和郎ではある、乳母を初め侍女供も、今に之

季

へ参る程に、静にしてお待ちなされ。」

ト臺詞の内、千鶴花道に逃行く。皆々これを追うて行く、ばたく
 にて向ふより、前幕の山内権九郎時實、走り来る。

時季

「時實殿か、これは好い處へ参られた。

●

「あまりお出が遅い故。

時季

「あつたら大事な若君を。

時季

「お逃し申す處で御座つた。

●

「これは誠に申分が御座らぬ、兎もあれ邪魔の這入らぬ内。

時季

「つらい役目を。

●

「濟すと致さう。

時季

上へ中に挟みて引立行き。瀧の根近く進寄り。

●

ト千鶴丸を引立て、瀧壺の處へ行き。

時季

「淋しき處を嫌はるゝなら、落ちて碎くる瀧津瀬の、水立ち騒ぐこれ

●

なる青淵。

時季

「底は奈落の八寒地獄、塞の河原の仲間入り、土産に小石を袂へ入れ。

●

「迷はぬ様に。

時季

「お出なされ。

●

上へ既にかうよと見えたる時しも。辻堂の戸を蹴開きて。あらはれ出

時季

たる。安達盛長。

●

ト辻堂より前幕の藤九郎盛長出で、中へ割つて這入り、きつと見得。

時季

「やア何奴なるか無作法千萬、入道殿のおほせを受け。

●

「此瀧壺に投入て、役目を果さん其處を。

時季

「何故汝は。

●

「留立するのだ。

時季

「汝等の様なドタバタ武士すら、主君の言葉を重んじて、千鶴君を瀧

●

壺に、投入んずる神妙さ。我も主人の若君が、淵に臨める危急存亡今

時季

「汝等の様なドタバタ武士すら、主君の言葉を重んじて、千鶴君を瀧

●

壺に、投入んずる神妙さ。我も主人の若君が、淵に臨める危急存亡今

眼前に見て居ながら、如何でか餘所^{よろ}に出来^{でき}べきや。それ故此所^{ゆゑこゝ}へつん
出たのだ。

季

「成程此奴の申す事、如何やら一理ある様なり。」

時

「我この若に遺恨はなけれど、主君の言葉に勢ひ附き。」

季

「これまで連れて参りしなるが。」

時

「主人の爲と言ふからは、助けたいが和主の一念。」

盛

「殺すと言ふが、汝等の一念。いづれも武士の。」

時

「意地と。」

盛

「意地。」

季

「留められるなら。」

時

「見ん事此場で。」

盛

「何を。」

三人

「小癪な。」

ト是より誂への鳴物に成り、盛長四人を敵手に劇しき立廻りある。

郎等二人上手へ逃入る。此内千鶴丸辻堂の中へ隠れる。好き頃皆

々氣の着き、驚きたる思入。

季

「此方にはかり氣を取られ。」

時

「大事な若を取逃したか。」

盛

「これにて先は安堵致した。」

季

「子供の足故遠くは行くまい、我は是より追掛け行かむ。」

時

「迹掃はずと少しも早く。」

盛

「汝を遣つてなるものか。」

雨人

「え、邪魔ひろぐな。」

上へ卯の花下し瀧津瀬の。水も溜らず切りつれ抜きつれ。結びあふた

る渦巻の。巴は解けて銘々に。行衛たづねて。

ト立廻りながら盛長、季宗、上手へ這入る、時實辻堂の裏へ廻る。

上へ急ぎ行く。折柄此所へ坂道を。倒つ轉びつ乳母園生。聲を限りに。張揚げて。

ト揚幕の中より。

若君様 千鶴君

上へ呼べば答ふる瀧の音を。便に爲して駈來る。

ト向ふより園生出で、直ぐ本舞臺に來り、其儘瀧壺を覗きて吃と見

園

「若君様 千鶴君 ○此所は正しく瀧見堂、季宗初め誰一人、姿の見えぬは如何した事ぞ。妾の方が早いのか、但しは遅れて間に逢はざり

しか ○若君様へのう。

上へ氣も狂亂の姥櫻 枯々にこそ見えにける。

トよろしく其處邊を捜す事ある。

上へ聲聴きつけて千鶴丸 喜連格子を細目に開き。

千 園 千 園 千

ト辻堂の格子を細目に開き、顔を半分出して。

「やッ、其所へ來たのは園生かや。

「えッ、其お聲は、千鶴君か。

「乳母か。

「若君で御坐りましたか。

「わア

ト千鶴丸泣きながら堂よりかけ下り、園生にピッタリ抱きつく。園生も其儘泣入る。床の合方に成り。

「ようまア御無事で御座んしたなア。

「これ乳母、早く連れて行つてたも。

「おう、此乳母が参りし上は、決して御案じなされますな。

「父上や母上と、言ふなど乳母が教へた故、私や一口も言ひはせぬに、痛と目に逢ふた上、此様な山の中へ、無理やりに連れて來て、恐ろし

い瀧壺へ、投入れやうとせられたわいなア。

「おう、御道理で御座りまする。」

「元の様な小袖を着て、早く父上や母上と、言へる様に成りたいわいなア。」

園

「御道理で御座りまする、妾が此所へ参りました上は、御心丈夫におぼしめせ〇うかく致して居る處へ、又もや彼等の参りなば、又酷い目に致します故、少しも早く、さ、お出あそばせ。」

ト捨臺詞にて園生、千鶴丸を背負ひ、花道へ行きかける。最前より堂の裏にて伺ひ居たる時實忍足にて附いて行き、好き處にて後より引留。

「待ち居らう。」

「ひえッ。」

ト園生驚きたる思入。

時

「おのれを逃して好い物か。」

ト千鶴丸を引下す。

「女どあなどり狼籍仕やるか、此所はなせ、此所をはなせ。」

「狼籍されるが厭となら、女の癖に腕立するな。」

「これが爲ずに居られやうか、此所を放して被下んせ。」

「え、面倒なし。」

時 園 時 園

上へ争ふ園生を振拂ひ、男力の無二無三。千鶴丸を引抱へ。瀧の根

近くかけ寄れば。園生は漸く。袖に絶り。

ト本舞臺に引戻し、園生は渡すまいとする。時實は千鶴丸を奪ふと

する。種々立廻りあり。ト時實、千鶴丸を引抱へ瀧壺目かけて

投入んとする、園生袖に絶付き。

「慈悲ぢや、情けぢや、時實殿。まア〜待ッて被下りませ。」

「いや待たぬ、待たれぬわい。」

時 園

園

「其方は役目であらうけれど、今若君を失うては、園生が身を入裂に、引裂いても御二人へ、申しわけが無い程に、此所を思うて時實殿、助けて、助けて、助けて被下れ。」

時

此時本釣鐘を打込み、風の音雨窓を下す。兩人思入あつて。「春の日永も早や暮れて、山陰なれば暗さは闇し。歸る夜道が淋しければ、急いで役目を果すと致さう。」

時

「すりや如何あつても若君を。」
「主命なれば仕方がないは。」
上へ無惨や其儘指上げて。瀧壺目掛け投げかくれば。女ながらも一生懸命。絶れば拂ひ。拂へば絶り。組つはぐれつ爲すはづみ。足踏

みすべらし三人は。さんぶとばかり。

ト三人よろしく立廻る内、足踏すべらして瀧壺へ落る。水の音を打込む、跡山おろし、ばたばたに成り、向ふより前幕の頼朝、山内

の郎等と立廻りながら出来る。上手より盛長、以前の郎等一人と立廻りながら出で、直ぐ本舞臺に來り、ぱつたりと出逢ふ。

「それに參りしは盛長ならずや。」

「我君にて御座ありしか。」

「御に響きし人聲の、俄に止みたる其上に。」

「水音高く上りしは。」

「早や千鶴の。」

「御最期なりしか。」

「一足遅れで。」

ト双方見事に郎等を投げる。

兩人

「わりしよな。」

上へなげきに沈む主従が。見下す淵は唯暗く。碎くる水の音のみぞ。物恐ろしく響きけり。

頼 盛 頼 盛 頼 盛 頼

頼朝、盛長、瀧壺を覗きて、ちツと思入。本釣鐘を打込む。
 『今ぞ長夜の夢覺めて、心を洗ふ白瀧の、末は川淀或は瀬々。』
 『浮沈榮枯は幻の、定めなき世と申すは虚言。』
 『此所に再び白旗を、ひるがへすべき時ぞ来て、我立かへる素の頼朝。』
 『此盛長は關八州、源氏に縁故の家族をば、それからそれと説廻はり。』
 『旗擧致すそれまでは、矢張懦弱の兵衛佐。』
 『夫につけてもおいたわしや、千鶴君の此御最期。』
 『親の怨みは入道清盛、我子の仇は祐親入道。』
 『いづれ主家の仇敵。』
 『今にぞ思ひ。』
 兩人 『知らして呉れん。』
 盛 『先づ我君には此の所を、人目にかゝらぬ其内に、少しも早くお立ちなされ。』

頼朝 『其死顔見る時は、又腸を斷つであらう。』
 『然らば迹を好きに頼むぞ。』
 『たしかに承知致しました。』
 頼朝 『頼朝しほくとして行きかける、此所へ僧文覺網代笠、鼠の着附墨の衣、好みの拵へにて向ふより出で、直ぐ本舞臺へ來り、頼朝に突當る。これより三人一寸だんまり様の立廻りありト、頼朝花道へかゝる、文覺は笠の儘見送る、盛長は笠の内を伺ふ。此模様よろしく、山下しに大小入り誂への三味線にて幕。』
 頼朝 『引付ると頼朝一散に向ふへ這入る。』

跡シヤギツ

○二幕目 奈古屋村端の場

本舞臺一面の平舞臺、真中より上寄に榎の大樹、下手好き處に捨石、上下藪、後在体の遠見、日覆より榎の釣枝、都て奈古屋村端の体。爰に

村の者音六、澤九、立かゝり居る。在所の嚙三千草、赤子を抱きて立かゝり居る。後の捨石に旅の僧、頓空、實は大場の牒者澁谷九郎重虎、坊主鬘、鼠の衣、脚半、草鞋に、網代笠を冠り、捨石に腰を掛けて居る。此模様よろしく、在郷歌に驛路を冠せて幕明く。

音 『此街道は木蔭が無いので、暑さの盛りには閉口だが、此板木が此所にゐるので、實に助かると言物だ。

澤 『手ぶらで歩いて溜らぬに、赤ん坊を抱いて居ては、随分汗に成るであらうに、さうしてこれから何處へ行かッしやる。

三 『二番草を此間取ッて、三番には未だ間があるから、此内に生佛と噂の高い、坊様に、此子の行末を見て貰はうと、それで此所まで来たのぢやわいなア。

音 『ア、あの奈古屋寺へ行きなさるのか。其有難い坊様と言ふのは、人の相を観る事は、日本一と言ふ事だが。

澤 『もし観て貰ッた其人が、悪い相でも出た時には、三尺ばかりの櫛の棒で、無茶苦茶に擲られるので、身に暗い所のわる者は、誰も恐れて行かぬさうだ。

三 『それでは嘸強らしい坊様で御座んせうな。

音 『いやも見るから毛掠ぢやらの大入道、五百羅漢を一人にして、仁王と閻魔を搦交せた様な、恐ろしい坊様だ。

澤 『なんとお鼻、お前の身に限ッて、闇い處はなからうが、もし、それ其處に、それがあつたなら、行くのは止しにさッしやれや。

三 『いえ、怪しい事は御座んせねど、其様な強らしい坊様を、此子に見せると泣出して、虫でも起すと悪いから、行くのは先づ見合せませう。

音 『なぞと子供に事密せて、お前は逃る丁簡か。

澤 『そりやこそぼつ、本音が出たの。

頓 此時後より頓空、笠を取りて拵石に掛けたる儘、

頓 『もし其奈古屋寺と言ふのは、これから何程御座りまするな。』

澤 『もうこれから二三町、して御坊はいづれより。』

頓 『何しにお出なされまするな。』

澤 『素は西國の生れながら、幼少の時より國を出で、諸處を遍歴致す者、常國奈古屋寺の文覺坊は、世にたうとき智識と聞き、其門に入り徒弟』

音 と成り、修業致さん愚僧が願ひ。それ故此所まで參ッて御座る。』

澤 『いやそれは好い道運ぢや。これお嘆、此お方も奈古屋寺へ、行かッ』

澤 『しやると言ふ事だ。』

澤 『案内をして上げさッしやれ。』

澤 『それは誠に好い道運では御座んすが、それそれ、如何やら今日』

澤 は夕立模様、裏の洗濯物が氣にかゝれば、一先づ歸るとしやうわいな』

ア。

澤 音 『なんで此上天氣に。』

澤 『夕立が来る物か。』

澤 ト此所へはたゞにて上手より、村の者伊太平、額に大な瘤のある

澤 鬘、村の者の拵へにて走出で、音六に突當る。これにて皆々氣の

澤 付き。

澤 『これは二本杉の伊太平殿か。』

澤 『只さへ大きな其頭に、大きな瘤を出かしたのは。』

澤 『如何した仔細で御座んすな。』

澤 『争はれぬ物、悪い事は出来ない物ぢや。』

澤 『どはまア如何した仔細で。』

澤 『御坐るか。』

澤 『聽いて被下、かう言ふわけぢや。』

澤 ト合方に成り。

伊 三 澤 音

伊

「今日奈古屋寺の上人に、相を觀て貫ひに行く途中、あまり喉が干いたので、新田五六の畑に這入り、西瓜を一ツ盗んで喰ツたが、いや悪事は千里の世の諺、我より先さへ走ツて居て、寺の崗を跨ぐ途炭、ウンと言ふ程額をなぐられ、それでこんなに瘤が出たのだ。」

四人

「おぬしの相なら西瓜より、南瓜面でありさうな物だ。」

三

「して瘤の出る程撲ツたのば、どんな人で御坐んしたへ。」

伊

「其癖其所邊に人間は、誰一人も居なかつたのさ。」

三

「人の居ぬのに頭を打れたとは、餘ッ程不思議で御坐んすなア。」

澤

「あの庵室の這入口は、餘ッ程鴨居が低いのに。」

三

「おぬしの丈が高いから。」

澤

「獨で頭を打ツたのであらう。」

伊

「言はれて見ればさうかも知れぬて。」

音

「いやこれは大笑ひだ。」

伊

「いづれにしても恐ろしやく。」

三

「妾も何んだか〇なに裏の衣物が心にかゝれば、又出なほすと仕ませうわいなア。」

伊

「其方も行くなら好い道連。」

三

「皆さん御免なされませ。」

音

ト足早にて兩人下手へ這入る。

澤

「さづ持つ足に、瘤持つ頭。」

音

「落首にでもありさうだ。」

頓

トこれにて頓空立わがり。

音

「しからば其奈古屋寺までは、僅か二三町と言はるゝか。」

頓

「向の藪を右へ廻れば、寺の屋根が見えますから。」

澤

頓

兩人

「もう直さで御座いますよ。」

「それは誠に忝けなし、然らばこれより参ると致さう。」

「迷はぬ様に行かッじやれ。」

ト挨拶よろしく、頓空上手へ這入る。

音

「今にの坊様も瘤をこさへて逃るであらう。」

「どれ大分日も傾いた、ぼつ／＼行くと仕様かの。」

ト在郷唄にて兩人下手へ這入る。迹合方變りて向ふより、文覺の弟

子相照、坊主鬘、鼠の衣、好みの拵へ。前幕の盛長切わら鬘、半

素袍、附太刀、檜木笠を持ち、話しながら出る。

盛

「今も道々申せし如く、主人兵衛佐事、是非とも師の坊に御意得たく

種々質議も致したければ、何卒貴僧の御取りなし、盛長一重に願ひ申

相

す。「其御取次は、極お安き事ながら、師はあの様な狂亂者、誰彼の川捨

なく、氣に食はぬ物は榊の木にて、狼籍に打擲致せば、萬一佐殿に

御怪我でもありては、誠に相濟ぬ事で御座りまする。」

「いやそれも皆承知なれば、一向願上まする。」

「左様なれば何日にても、お出なされ、お取次は致しまする。」

「それは千萬忝けなし、幸ひ今日は日晴も好し、事に依りなば暫らく

相

致して。」

「お出どあらば其ツモリで、お待ち申すで御座りませう。」

ト矢張話ながら上手へ這入る。迹風の音時の鐘にて、此道具廻る。

○二幕目 文覺坊庵室の場

本舞臺三間の間、中足の二重。三方折廻して、茅屋根の庇、杉丸太の椽
側、上の方三尺佛壇、此下眺への開戸、押入の模様。是より續けて鼠壁
これに榊の棒を立てかけてある。下の方三尺破れたる唐紙、出這入あり。

好き處石塔を倒したる沓ぬぎ。上手少しく下げて一間の續き屋体、反古張の障子を立て、椽側續きに成る。茲に阿伽桶を手洗鉢につかひ、樋竹を掛けてあり。下手敷疊、破れ目を卒塔婆にて繕ひある。此後山々の遠見。いつもの處に片折戸、都て文覺坊庵室の体。爰に以前の頓空、屋体に向ひて立ッて居る。此見得合方にて道具留る。

頓 『物申し候、これは諸國行脚の僧にて、頓空と申す者、文覺御坊に御意得たく、遙々これまで参りたれば、御取次の程願入る。

トよろしく思入あッて向きなほり。

頓 『本堂にても二度三度、此方へ廻りて幾度も、聲高に申入れても、更にいらへのあらざるは、誰も内に居られぬと見える。其内主人も歸られやう、暫くそれまで待つと致さう。

ト椽側に腰を掛ける、在郷唄、粘入の合方に成り、向ふより下男五斗平、後茶髻鬘、筒袖、小袴にて薪木を背負ひながら出來り、花

道好き處にて留り。

五 『いやも内の師の坊程、わけの分らぬ人はないわえ、一月が二月でも、湯にといつたら這入ッた事なく、顔も録々洗はッしやらねば、髭もぢゝむ、月代もぢゝむ、夜が晝で晩が朝で、トント埒の明かぬ事ぢや、それに又如何した事か、今日に限ッてコリヤ五斗平、風呂を湧せエと大きな目で物を言はッしやるぢや。夏の事なれば行水は如何と、言葉返せば、黙れッと又睨まッしやるぢや。何んの爲めに湯を立るのか、何んで又湯に入ッてめかしなさるのか、コリヤてッさり袈裟殿の夢でも見なさッたと見える。

ト右の合方にて本舞臺に來り、片折戸を明けて這入る。

五 『やれゝ重かッたゝ、ぞれ早速風呂をたてると仕やうかの。

ト薪木を下しながら言ふ。

頓 『其所の御方チ、承はりたく存じまする。

頓 五

「おう見れば旅の御坊、シテ御御川で御座りまするな。

「只今文覺坊には、御不在に御座りまするか。モシ御出とならば、頓空と申す者、是非とも御目にかゝりたしと、何卒お傳へ被下れたし。

頓 五

「それでは御坊は内の和尚に、お目に掛りたいとお言ひなさるか。

「如何にも左様に御座りまする、お目に掛りし其上にて、種々御教示受けん爲め、遙々参つた者で御座る。

五 頓 五

「其奴はちくと駄目だわえ。

「それでは勸進の御留守にても御座るかな。

「いや、和尚は奥で寝て居られますが、其御教示と言ふ事は、大層痛い御教示で、誰彼の用捨なく、禰の棒で打ちのめすが、師の坊の得意、それ故今まで弟子入りに、來ては、歸り、來ては、逃出し、四五十人も入代れと、誰一人落付く者なく、漸く相照と言ふ弟子と、私と二人が居るばかりぢや。

頓

「其打擲致される事は、此村端で承はりしが、素よりそれしきの呵責は覺悟の上、決して厭ひ申さねば、此由お傳へ被下たし。

ト此時奥にて。

文

「何んだ、文覺に遇ひたいと言ふのか。

ト唐紙を明けて前幕の文覺、伊賀栗鬘好みの拵へにて出で、二重好き處に住ひ。

頓 文

「まづこれへ上らッしやう。

「然らば御免被下れ。

ト頓空二重へ上る。

五 文 五

「此人の癪は何處へ出るか、此様子では大きそうだ。

「五斗平。

「へ〜。

文

「早く風呂を湧して置かぬか。

五

「へい〜畏まりました。」

ト裏手へ這入る。詭への合方に成り。

「して法師に遇ひたいとは、如何なる用の趣きにて、わざわざこれまで参られた。」

頓

「身は雲水の間に在りて、東西南北心に従ふ、用と申すは俗家に有り、黒衣を纏ふ佛門に、如何なる趣きありと言ふ、別に仔細は御坐らねど、豫て貴僧の心高く、一氣佛眼の明かなりと、下界の噂を振鈴の、たよりと爲して参りたれば、何卒御弟子入りの程、おゆるし彼下れ。」

頓

「扱も口好者の法師かな、まア、ま、それから次ぎを言はッしやれ。」

「されども入門の前に於て、此頓空が胸に落ぬ、不審の方を承はり、疑念を晴したく存じまする。」

頓

「まづそれを言はッしやれ。」

「人の噂に依る時は、御坊の門に入らんとて、わざわざ参る徒弟等を、

無差別に打擲なされ、追歸さるゝと承はる、以ての他の御亂行、御心あつての上なるか。」

頓

「まづ其次ぎを言はッしやれ。」

「親は子を育て、師は弟子を憐む習ひなるに、各なき同宿を打据らるゝは、甚だ以て心得ず。何故左様に致さるゝか。」

文

「そんな屁理屈を言出すから、それで我が打据るのだ。」

頓

「何んと言はるゝ。」

文

「一々言聽かせるも面倒だ、撲られぬ内歸れ〜。」

頓

「いや其仔細承はらねば、いつかな此所を立去り申さぬ

文

「撲れてもか。」

頓

「如何にも。」

文

「好し、望み通りに打据え呉れん。」

頓

ト文覺立上りて棒を取り、ちツと見得。

文 「今此棒を以て打ち出なば、夫れを汐に汝よりも、切ッてかゝるであらうがな。」

頓 「やッ。」

文 「知らぬと思ふか大白痴、我今汝の相を観るに、悪氣満々言ふに言はれぬ臭氣を帯び、大場よりの間者ど、額の面にあらはれ居るは。」

頓 「それ知られては。」

ト懐中より短刀を出し、切ッてかゝる。木魚入りの合方にて立廻りある。ト、棒にて短刀を打落し、散々に打据る。

文 「五斗平く。」

文 「へッく何御用で御座りまする。」

ト出で、此体を見て驚く。

文 「こりや風呂は出来たか。」

五 「程なく沸きまするで御座りませう。」

文 「さうか少々ぬるくても好いわ。」

ト頓空を打捨て、見向きもせずに行きかける。頓空又も切りつける、文覺拳骨で頭をくらはせる。これにて頓空もうかなはぬと言ふ思入、片折戸まで逃出す。

文 「待てく。○此文覺は、平氏調伏なんど、小面倒な事は致さぬと、歸

ツたら大場に傳へよ。」

頓 「何處まで圖太き。」

文 「何んだ。」

頓 「入道目。」

文 ト一散に駈けて向ふへ這入る。

「手のろき咒咀を致すやうな、文覺ではないわえ。」

ト思入あッて、唐紙を明けて這入る。

五 「あの間者目、わびく髪を剃落して、まんまと化けては来た物の、

文

文

頓 文

頓 文

文

五

和尚おしやうにそれと見みわらはされ、坊主ぼうず丸殞まるごんで逃にげ居ゐつたわえ。

ト裏手うらてへ這入はいる。

跡誂あとあつらへの合方あひかたに成なり、向むかふより以前いぜんの相照さうしやう先さきに、前幕まへまくの頼朝よりとも、折をり鳥帽子とりぼうし、香にほひの小袖こそで、白しろき小袴こはかま、好このみの拵こしらへにて出いで、花道はなみちにて留とまり。最前さいぜん盛長もりなが殿どのにも申上まをしあげた通とほり、彼かの物狂ものぐるはしき一事いしじはいつくまでも御辛ごしん抱被はうく下くだりませ。

相 頼 相
「我われ釋尊しやくそんにあらねども、阿羅々あらか仙せんにも劣おとらざる、文覺もんかく坊ぼうにお目めに掛かり、法のりの道みちを承うけたまはるに、斯程かほの事ことを忍しのぶ事こと、何なんの隔意かくい致いたさうや。

相 頼 相
「それ程ほど御覺悟おんかくごある上うへは、大丈夫だいぢやうぶで御座ござりまする○さア御案内ごあんない致いたしませう。

ト矢張やは右みぎの合方あひかたにて本舞臺ほんぶたいに來きたり。

「さア先まづあれにお通とほりなされませ。

「然しからば御免被下ごめんくたされ。」

ト頼朝よりとも二重にじゆうに上ある。

相 頼 相
「どりや私わたくしは裏口うらぐちより、お出いでの山やまを師しの坊ぼうに、申上まをしあげで御座ござりませう。

ト相照さうしやう裏手うらてへ這入はいる。

頼 相
「時ときを罵ののし文覺もんかくが、遠藤えんどう武者むしやの昔むかしも忍しのばれ、偕まても異ことなる庵いほりの有様ありさま、主人あるじもさこそと思おもはれる。

トぢつと思入おもいれ、此時このとき奥おくより相照さうしやう白湯さくぢを持出もちいで。

「只今ただいま師しの坊ぼうには、入浴ゆあみを致いたし居ゐりますれば、暫しばらくく御待おまち被下くだりませ。

「此方このほうには御遠慮ごえんりよなく、ゆるりと御入浴おゆあみあるやう御傳おつたへ被下くだりませう。

「其内そのうちに裏山うらやまの、梨なしの實みなりと取とつて参まりませう。

「我われへとならばお構かまひあるな。

「いえ〜山寺やまでらの御馳走ごちそうには、こればかりで御坐ござりまする。

トこれより床ゆかの上じやうるりに成なる。

相 頼 相 頼 相

上へ言ひつゝ立つてどつかはと。一間へこそは入りにつれ。

ト相照一間へ這入る。

「柵の棒の折るゝとも、力の限り打擲受け、我と我身をためし見

ん。

上へ威儀を正して頼朝は。出るを今と待ち居たり。

ト頼朝よろしく身を構へる。

上へ折柄唐紙押開き。あらはれ出たる荒法師。

ト文覚湯上りの心。唐紙を明けて出る。

上へ何思ひけん椽側を。二度三度行きかへる。此方は今や打たるゝか

と。心定めて控ふれば。續く一間の障子越し。きつと睨んで。

ト文覚椽側を二度三度行きかよひ。ト續き屋体内に這入り、障

子越しに頼朝を見る。

文
「うひ。

ト點頭き、すかゝと頼朝の下手へ廻り、かつぱと打伏し。

文
「よくも下野殿に似ましたり。

トよろしく憂ひの思入、頼朝撲られる事と思ひしに左はなき故存外

なる思入、合方しんみりと成り。

文
「法師日本國を修行の爲め、在々所々を偏歴なし、六孫王の末葉とて、

見參せし殿少からねど、未だ上に立て一天四海を奉行すべき人一人も

なかりしが、今御邊の相を見奉るに、勇力威權二個ながら備はり、實

に天晴の御大將、未憑し。

頼
「思ひも依らぬ其御言葉、左様に人を煽り給ひては、此場に居づらう

文
御座りまする。

「さや、法師の眼玉は凡夫の眼に非ず、左は大聖不動、右は孔雀明

王の御目なり。人の果報を知り、日本國を照し見る事、掌に蟻を取ッ

て、臚の數さへ讀む文覺、左程の事が見えいでならうか。

文 頼 『何んと言はるゝ。』

『源平兩家は一天の守護、互に交る將軍の、職は四海を鎮撫なし、彼の討たぬは此方より討ち、我に爲さぬを彼方に爲し、一心中に他事の可からず、さるを入道清盛は一旦の果報に引かれて、今は天下を獨歩の勢ひ、傍若無人の舉動爲し、惡逆日々に増長なせど、彼奴早や宿運既に盡たり。小松内府は病に没し、其他の一門酒色に溺れ。世を治むべき力は失せたり。如何に兵衛佐殿。二十餘年の昔に歸り。再び源氏の世と爲して、下野殿の耻辱を雪ぎ。』

ト思入わッて。

文

『かゝる事は申さすとも、逐一腹にたくはへ置き、空とぼけを爲らるゝとは、中々喰へぬ大將かな。』

頼

『假令何んと言はるゝとも、毛頭おぼえ無き事なり。池の尼の情けにて、命繋がる此頼朝、唯々尼の後生を祈り、毎朝揚る讀經三昧、今日

これへ参りしも、意執我執を打拂ひ、三途の苦惱を遁れん爲め、又二つには亡き父や、千鶴丸の菩提の爲め、法華經誦唱願はんと、参りし他に所存は御座らぬ。』

文

『下野殿には申さすとも、昔なぢみの此文覺、千鶴君には死なる、時、参り合せし緣故もわれど、和尚讀經は大嫌ひ。』

ト合方きッぱりと成り。

文

『これ佐殿、御邊も我も流人、我より打明けて物語るに、隠立致さるゝは、近頃お怨みに存するて、國こそ多けれ、處も廣けれ、當國伊豆に流されしは、天の與ふる賜物なり、時至ッて行はざれば、反ッて其殃を受くるとかや、時熟したり、ヤツつけられよ。』

トキツパリと言ふ。

頼

『何から何まで星を示され、達眼の程感に絶えず、さりながら此頼朝、今は勅勘を蒙りて、日月にさへ憚りある、身は浪々の悲しさに、如何

文 で大議を起さる可きや。

文 「やアまだ、一皮冠る氣か、但し文覺の眼漸々衰へ、魚目を珠玉と過まりしか、誠實情弱の御邊なら〇らむ、それよ。

ト立上りて榊の棒をおツ取り。

文 「これは抑も下野殿の墓邊に生へし榊を削りて造りたる、三尺半頃の打棒なり。義朝公が呵責の筈、骨に銘じて受けられよ。

ト打ツてかゝる、其手を頼朝押へて、双方きツと見得。

頼 「それ程までに申さるゝを、いつまで隠すも益なき次第、さらば萬事打明けるで御座らう。されど御坊も御坊なり、御身よりも何故に、我へ打明け被下らぬ。

文 「何、此方よりも打明けよとな。

頼 「何、此方よりも打明けよとな。

文 「高雄山神護寺建立の儀を。

文 「如何にも。

ト膝を打ツて。

文 「道理千萬。

文 「榊の由來、随分面白く承はった。

文 「それ程分つた御邊とは思はざりし。まだ、榊で行かぬと見たら。

ト立上ツて押入を開く、中に白骨をかざりある。

文 「これで昇ぐ量見で御座った。

兩人 「ひは、ひは。」

ト双方居なほる。

頼 「斯くと互ひに分りし上は、改めて此方より、平氏追討の院宣を授かる様願ひ申す。

文 「それは慥かに承知致した、七ヶ日の入定と世間を諷り、拔道から窺

かに上浴致す故、御心安くおぼさる可し。

頼 「他日志を得たらむ時は、望み給ふ國々を、必ず寄進致すで御坐ら

文

「今日は久々に浴みを致し、身を清めたる甲斐ひッて、大檀那を定めたわえ。」

盛

ト此所へばたくにて向ふより盛長走り出で、直ぐ本舞臺に來り。

頼

「我君御迎へに参りました。」

文

「好くぞ参つた。長居致さば後日の恐れ。」

盛

「成程世間は相變らず、五月蠅き物で御坐るよな。」

文

「只今参る道すがら、怪しき法師の道端にて、連りに思案致し居りし

頼

「もしや間者にあらざるか。」

文

「其奴は最前打撲り、追拂ひたる偽法師と相見える。」

頼

「いよいよ油断は致されず、然らばこれにて御免被下。」

文

ト立上り二重より頼朝下りる。

頼

ト立上り二重より頼朝下りる。

文

「こりやく容人のお立ちなるぞ。」

文

トこれにて裏手より相照先きに、五斗平出で控へる。文覺片折戸ま

文

で送る。

文

「涼しくなりなば。」

文

ト思入、これを木の頭。」

文

「又御坐れ。」

文

ト皆々挨拶の模様よろしく、合方にて幕。

○三幕目 土肥郷勢揃の場

本舞臺一面の平舞臺、笹龍膽の附きたる白き陣幕を張り、諸所に篝火を

仕掛け、總て陣外の休。茲に宇佐美平太、堀藤次、鮫島四郎、大江平次、

甲冑附太刀にて立掛り居る。山おろしに遠寄を冠せ幕明く。

宇 「御犬將頼朝公には、伊藤の館を立逃きて、北條一家をかたらひ給ひ、

去んぬる八月十七日、八牧の塞を夜討に爲し。

堀 最先き祝ふ血祭は、和泉判官兼隆の、首級をあげて味方の勝利、これ一重に當國の、三島の神の應護なるか。

大 今又土肥の勢揃、蛭ヶ子島を立出で、豆相の軍勢三百餘騎、皆是君の御爲めに、一命捧げし剛の者。

大 矢種のあらん其限り、射落すのは平家方、大塲股野を初めと爲し、君家に仇なす葉武者輩、手當り次第打倒し。

堀 伊藤入道祐親の、劔首捻切り引提げて、千鶴君の墓前に曝し。

大 それより直ぐ様馬面を、西へ引向け出立なし。

大 乗入る先きは清盛が、榮華に誇る攝州福原。

大 唯一挫に蹴散して、坂東武者の威勢を見せむ。

堀 實に勇ましき方々が、筋むら高き腕だめし。

堀 五体がぞくぞく。

四人 震ふは〜。

堀 彼此言ふ内段々に、陣内狭く詰寄せ來たり、程なく軍議の初まる刻限。

堀 公藤介茂光まつた狩野五郎親光には、未だ着到無き様子。

大 如何致した事なるか、よもや返り忠もめさるまら。

大 話の内にあれ〜人影が相見える。

堀 大兵肥満に物具の、音も高らかに響くのは。

堀 たしかに公藤。

三人 茂光親子。

ト皆々向ふを見る。矢張遠寄にて、向ふより公藤介茂光、一子狩野

五郎親光、甲冑附太刀好みの拵へにて出で、直ぐ本舞臺に來る。茂光

肥満にて歩き悪き仕打あり。

堀 遅かりし茂光殿、今も噂を。

三人 致して御座る。

公 「御覽の如く大兵にて、兎ても身輕には歩行れず、道々子息に助けられ、漸く致して参りし次第、随分これでも急ぎ居ったぢや。

狩 「心は疾れど体は進まず、思ひながらも遅刻致した。

公 「左様な節には、騎馬にて駈附られては、如何で御座るな。

狩 「何が扱て拙者を、持てたへて乗せる程の、丈夫な馬が御座らぬので、兎角此様に難義を致すは。

大 「然らば牛では如何で御座るな。

公 「それでは火急の間に逢ひ申さぬ。

大 「いや誠にそれは、不自由千萬。さぞ戦場では。

公 「おこまりで御座らうの。

狩 「なんのく、敵の北るを追ふ時は、手柄を人に譲るとも、我軍萬一利あらずして、ツツばしる事あらば、踏留ッて殿なさん。

狩 「斯く申す親光の、側に附添ひ居る上は、何百人群ることも、びくとも致す事では御座らぬ。

大 「天晴勇々しき其御言葉、大事の軍に一人にても、味方を貴ぶ今日なれば。

公 「御兩所の御決心、承はッて我々も、心丈夫と申す物。

大 「兎もあれ是より大將の、御前へ一先御越わッて。

三人 「得と軍議を。

公 「お凝しめされ。

親 「然らばこれより君前へ。

二人 「伺候致すで。

二人 「御坐らうわえ。

ト 兩人上手へ這入る。

字 「これにて大概集まりたれば。

堀

「我等も御前へまかり出で。」

「及ばずながら評定の。」

「未座に加はると致さうか。」

ト四人拾臺詞にて、上下へ分れて這入る。迹誂への合方に成り。向

より佐奈田與一義忠、甲冑、附太刀、好みの拵へ。郎等文三家安、

腹巻、臙常、好みの拵へにて出で、直ぐ本臺舞に來り、好き處に

て立留まり。

義

「父上には、最早陣内に御這入なされ、軍議の列に連りて、種々御評

議の事と存じられる、誰か取次ぎ呉れる者はなきか、折悪しく此四邊

に、知人の影だに見えず、ほど／＼當惑致すわえ。」

宗

「暫時これにて御待合せ被下、此文三日が、如何様にも致しまして、

大殿に御目に掛り、豫て貴郎の御志願を、お遂げさし申しまする。」

「あれ／＼、幕内にて評定の口々、あの御聲は父上ならずや。」

家

「誠に大殿の御聲音〇えい、早く誰か參ればよいに。」

ト兩人色々氣を揉む仕打、此所へ幕の内より。

「何者ぞや、幕内を窺ふ癖者、其所動くな。」

ト合方變りて、前幕の藤九郎盛長、甲冑、附太刀、好みの拵へ、幕

をか、けて出る。

「名乗れ、何者なるぞ。」

トキツと言ふ。

「決して怪しき者にはあらず、岡崎四郎義實が一子、佐奈田與一義忠。

「郎等文三家安に御座りまする。」

「おう、佐奈田殿か、これは失禮仕ツた。」

「いや、陣内を窺ひしは、拙者が不重寶、此方より過まり申す。」

「八牧以來御病氣と承はりしが、好くぞ馳つけめされたり。」

「未だ御本腹には御座りませぬと、押して御出陣に御座りまする。」

盛

「名乗れ、何者なるぞ。」

トキツと言ふ。

「決して怪しき者にはあらず、岡崎四郎義實が一子、佐奈田與一義忠。

「郎等文三家安に御座りまする。」

「おう、佐奈田殿か、これは失禮仕ツた。」

「いや、陣内を窺ひしは、拙者が不重寶、此方より過まり申す。」

「八牧以來御病氣と承はりしが、好くぞ馳つけめされたり。」

「未だ御本腹には御座りませぬと、押して御出陣に御座りまする。」

家

「誠に大殿の御聲音〇えい、早く誰か參ればよいに。」

ト兩人色々氣を揉む仕打、此所へ幕の内より。

「何者ぞや、幕内を窺ふ癖者、其所動くな。」

ト合方變りて、前幕の藤九郎盛長、甲冑、附太刀、好みの拵へ、幕

をか、けて出る。

「名乗れ、何者なるぞ。」

トキツと言ふ。

「決して怪しき者にはあらず、岡崎四郎義實が一子、佐奈田與一義忠。

「郎等文三家安に御座りまする。」

「おう、佐奈田殿か、これは失禮仕ツた。」

「いや、陣内を窺ひしは、拙者が不重寶、此方より過まり申す。」

「八牧以來御病氣と承はりしが、好くぞ馳つけめされたり。」

「未だ御本腹には御座りませぬと、押して御出陣に御座りまする。」

義 盛 「君にもさぞや御満足。いざ御案内仕らむ、評定の席にお加はりめさ

義 盛 「其席に参らぬ内、父義實へ是非く面會致したければ、斯くもお傳

義 盛 「その儀承知仕つた、兎に角これより御這入りあれ。

義 盛 「計らず貴殿にお目にかゝり。

義 盛 「好い御都合で御座りました。

義 盛 「先づ。

義 盛 「先づ。

義 盛 「さらば此方へ。

義 盛 「御免。

義 盛 ト盛長先きに義忠、家安、幕の中へ這入る。

義 盛 ○迹知せに付き陣幕を引いて取る。

義 盛 本舞臺一面の平舞臺、正面源氏の紋の付たる陣幕。上下同じく陣幕を張

義 盛 り、諸所に篝火等よろしく、真中少しく上に寄りて。兵衛佐頼朝、甲冑

義 盛 好みの拵へにて床几に腰を掛け居る。太刀持の童二人附添ふ。後に甲冑

義 盛 の武士大勢、上の方に土肥次郎實平、土屋三郎宗遠、築井次郎義行、新

義 盛 開荒太郎實重、甲冑好みの拵へにて、楯の上に座して居る。中程より下

義 盛 に寄りて、北條四郎時政、岡崎四郎義實、甲冑好みの拵へにて、同じく

義 盛 楯の上に座す。少しく下りて下手に、藤九郎盛長、公藤介茂光、狩野五

頼 頼 「如何に方々、文覺坊が斡旋にて、平家追討の院宣を授り、不肖なが

頼 頼 らも此頼朝、蛭ヶ子島に旗擧爲せしが、好くぞ縁故を忘れられず、瞬

頼 頼 く内に四方より、我遅れど馳付けられ、誠に満足に存じ居る。斯く

頼 頼 軍勢の揃ひし上は、暫時も猶豫爲すべからず、大場股野と合戦の、手

善をどくと評定爲し、今後の事を定め置かむ。

盛 「入牧の寒に攻入りしは、僅かに八十五騎なりしが、源家重代の白旗を、蛭ヶ子島に立てしより、今は三百有餘人。

土 「源家の高恩受けながら、二股武士の腰弱く、大場股野に加擔の軍勢、武相二箇國三千餘騎。

土 「云はゞ一騎に十騎の割合、一夫之を守る時は、百萬の兵も越るに難く、實に天嶮の一本街道。

新 「弓手は函根の山縷さ、殊には峨々たる石橋山。

公 「馬手は相摸の海原に、打寄す浪のいと荒く。

狩 「名も親知らず子知らずや、此所生死の潮境。

字 「親は源氏は平家、或は同胞敵味方。

堀 「同じ血筋の血を流し、海に眞紅の潮を湧す。

堀 「山には又も屍の、山を築きて倒るゝども。

大 「再び起す源の、基礎定めむ今度の合戦。

土 「我も埋木の數ならぬ、數に加はる喜ばしき。

土 「萬々歳と。

皆々 「祝し申す。

頼 トこれより本神樂を遠くにて聴かせ。

「抑も戦場は米神より、早川尻の間とならば、嶮しき山路に闇夜の亂

軍、前より銘々覺悟を極め、矢合戦よりも器物にて、切結ぶこそ上策

なれ。敵勢三千餘騎の中、力駿れし者あらむ、殊に響きし強の者は、

大場股野の兄弟とや、彼等と引組み捻伏せて首級を揚む者は誰ぞ。

土 「膏平承はらむ。

ト進出る。續きて安達藤九郎。

盛 「いや拙者が引組み申さむ。

上手の「此所に候」
大勢の「我等こそ」
下手の「我等こそ」
皆々「我等こそ」

ト一同勇立つ。北條四郎思入あつて。

「お騒ぎなるな方々、斯く我先きに争うて、無益に時を過さむより、我君に御撰定を、願出づるが宜しからむ。」

「實に北條殿の申さるゝ如く、左様致すが當然で御座らう。」

「此儀如何に。」

「御座りまするや。」

ト頼朝に伺ふ、頼朝思入あつて。

「此方には名指さむより、其方兩人の内に於て、撰拔致すが好からう。」

「すりや撰抜の儀を我々に。」

頼岡

「おほせつけに御座りますか。」

「如何にも。」

北岡

「はア。」

ト兩人居なほり。
「義實殿、先づ和殿より御撰びあれ。」

「先づ和殿より申されよ。」

「いや、拙者などの鈍き眼にては、兎ても勇者を見出し得ねば。我に構はず撰ばれよ。」

岡

「拙者とても同じなれど、左様におほせある上は、只今名指し申すで御座らう。」

ト立上ツて見渡す、皆々我撰出されんとよろしく思入ある。

義岡

「次に扣へし佐奈田義忠、申す事あり、早や参れい。」
「畏ツて御座りまする。」

岡 ト以前の義忠下手より出で、好き處に住ふ。義實頼朝に向ひて。
「大場股野と組打爲し、負を取らじと思ふ者は、即ちこれに御座りま
する。」

字 「誰が指さるゝかと思ひしに、岡崎殿の秘藏子なる。」

堀 「佐奈田與一。」

皆々 「義忠殿。」

頼 「義忠には病氣にて、伏せり居ると聞きたるに、好くぞこれまで参り
しよな。」

岡 「少しく所勞に衰へたれども、大場風情と組合ふに、何條障りあるべ
らや、先づ義實の眼にては、此若武者こそ其者と、撰抜の役目言上申
す。」

トきッぱりと云ふ、皆々不満の思入。

殿 「與一殿は果報者。」

大 「好き親御をお持ちなされ。」

字 「浦山しく。」

皆々 「存じ申す。」

岡 「親の身にて申出しは、私ゐるに似たれども、思ふ心を枉ぐるこそ、
還つて君へ不忠なれ、人の嘲を受くる事、豫て覺悟の岡崎四郎、御
批判あらば承はらひ。」

トきッと思入。

北 「いしくも岡崎殿申されたり、趙武舉るに私讐を以てし、祁奚薦むる
に己が子を以てせり。天晴なる御撰抜、北條四郎も同意で御座る。」

頼 「兩人斯くと申す上は、義忠に先陣申付けらるぞ。」

義 「は、はッ難有う御座りまする。」

頼 「大場股野は名ある奴原、随分ともに心を用ひ、打取つて高名なせ、
これが軍の手初めなるぞ。」

義

「御心安かれ我君、此義忠が眞心は、大盤石も微盡に碎き、只一息は蹴散して、捻切りたる二人が首級、御實驗に供ゆるは、瞬く内に御座りまする。」

義 頼

「勇まし、勇まし、目出度く凱旋を相待ち居るぞ。」

「抑せ畏ッて御座りまする。」

ト頼朝に辭儀して、次ぎに北條に向ひ。

「御推撰に預り、忝なく存じまする。」

「随分高名致されよ。」

「さらば父上、御別れ申しまする。」

「随分共に手柄を致せよ。」

「方々〇あらためて御意得ませう。」

ト皆々に辭儀渡りて。

「おさらばで御座りまする。」

義

義 岡

義 北

義

義 頼

トすかくと花道へ行きかける。

「待て。」

「何御用に御座りまする。」

ト花道に扣へる。

「申すまでも無き事なるが、満座の方々を捨置いて、其方を薦めし父が心〇合點であらうの。」

「父上が列座の方々を捨て、此義忠をお撰みありしも、御前に於て拙者が、身に似合ぬ高言吐きしも、同じ心と存じまする。」

「如何にも。」

ト兩人顔見合せ、愁嘆よろしく。

「其勢ひで、行けッ。」

「は、はッ。」

トドンデヤンにて勢ひ込んで向ふへ這入る。

「は、はッ。」

トドンデヤンにて勢ひ込んで向ふへ這入る。

義 岡

義 岡

義 岡

義 岡

義 岡

義 岡

頼 義忠先陣致せし上は、後詰の構へを評定爲さむ。

岡 「いづれも席を。」

ト軍扇を開きて顔を隠すを道具替りの知せ。

岡 「お進めなされい。」

此模様、誂への鳴物にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺。向ふ山々の遠見、上手柵矢來に陣幕を張り、丸木の陣門。前に篝火あり。中に諸家の絞の附きたる旗を幾流も立て、下手杉の木立にて見切り。都て陣所入口の体。茲に雑兵四人、出入を守り居る。此模様山おろしにて道具留る。

ト直ぐに以前の文三家安、上手より走出で。

馬 文 「佐奈田殿の馬廻りは、いづれにあるや、殿の御出馬なるぞ。」

馬 「おう——。」

ト誂への鳴物にて、下手より馬廻りの雑兵二人、白茸毛の乗馬を引

きて出る。文三受取りて口を取りて待ち居る。はた／＼にて上手

より以前の佐奈田與一出で。直ぐに馬に跨り。

義 「佐奈田與一義忠只今出陣。」

ト大きく言ふ。陣内にて大勢鯨波の聲をあげる。大小入り勇ましき

合方にて、文三口を取りたる儘、雑兵跡より附添ひ、義忠向ふへ

這入る。跡甲冑の武者大勢出で舞臺に並ぶ、續して藤九郎盛長、

錦の袋の中に院宜を入れて、これを白旗の頭に結びたるを持ちて

出る。迹より頼朝初め皆々出る。土肥次郎下手に向ひて。

土 「君の御出馬なり、要意が能くば、これへ曳けい。」

ト下手の方にて馬廻りの者、雑兵等大勢。

大勢 「おう——。」

ト櫓の音を響かす。盛長、白旗を陣門の處に立てる。皆々威儀を正す。

頼

「朝威を輕んずる平氏一門、追討せよこの院宜は、納めて白旗の頭にあり。いづれも禮拜致すべし。」

トキツと言ふ。これにて皆々下座する。頼朝平伏して禮拜の有様よろしくある。好き頃遠寄を打込む。皆々立上り。きつと成る。

頼

「いでやこれより。」

ト向ふを見込むを木の頭へ

頼

「征討なさむ。」

ト皆々勇立つ、此模様誂への鳴物にて幕引付ると此の道具陰廻しにして直に尻明けになる。

○同返し 米神越岐路の場

本舞臺三間前へ出して高足の二重、岩組の蹴込。上の方少しく後へ下げて大なる岩山の登り口、同じく上手へも登り口あり。此所に右石橋山、

左函根山と誌したる傍木杭。好き處捨石。諸所松の立樹、日覆より松の釣枝。向ふ一面山又山の遠見。二重下手より花道へ岩組の登り口、爰に三尺程の丸木橋を掛け、此奥より清水の流れを書割し波布、舞臺前一面に敷つめ。上下岩山の張物にて見切り、都て米神越の体。山おろしにて幕明く。

幕明く。

ト床の淨瑠璃に成り。

上へたとへば爰に義忠は。梅の蕾の若武者とて。打乗る駒は東國一。

古巢に返る鶯の。谷の戸渡り。峯傳ひ。勇立ちてぞ駈來る。

ト山おろし、誂への合方にて、向ふより文三家安先きに、松明を持ち、走出る。迹より與一義忠、乗馬にて出る。丸木橋の處にて留

り。

り。

義 「土肥郷より遠乗なし、息も次がずに参りしが、其他の者は如何に爲せしぞ。」

文

「遅れて未だ来合せませぬ。」

義

「爺も疲勞致しつらん、幸ひこれに小流あれば、馬の口を嗽ぎて取らせよ、我も暫時休息致さむ。」

文

「何の未だ七八里は、たゆまず御供が出来まする。」

義

ト義忠馬より下りて二重へ上り、捨石に腰を掛けて休む。文三は腰に指したる馬柄杓を取つて、馬の口を嗽ぎ、それより馬を勞りながら丸木橋を渡して、同じく二重に上る。

文

「只今水を遣はしましたが、鶯目大喜びで御座ります。」

義

「左様でありしか〇面倒ながら義忠にも、清水を一杯酌で呉りやれ。殿にも召上りまするか、それならば清い處を、とれ酌むで参りませう。」

文

上へ 駒を立木に繋ぎおき。降行く谷のそこはかど。流れえらみて酌取る清水。

義

取る清水。

文

ト文三、馬を立木に繋ぎ、松明を岩の上に置き、谷川に下りて、能く柄杓を清め、これにて水を酌み。

義

上へ 何心なく文三が、指出す杓を。手に取りて。

文

ト文三、馬柄杓を指出す。義忠これを受取りながら、よろしく思入。

義

上へ 咽びながらも二口三口。一口ぐつと飲下し。

文

ト義忠飲みながら咽ぶ。

義

「こりや如何爲されましたか。」

文

「いや何んども致さぬ、アマリ火急に飲みし故、喉につかへしばかりなるぞ。」

義

「それならば宜敷けれど、清水に塵でも交つて居たかど、大きに心配致しました。」

文

「塵などの交るべきや、誠に類なき靈水にして、甘露の味とはこれを言はめ、爺よ、其方も一杯飲むで見よ。」

文

「ありがたうは御座りますれど、最前谷川で御毒味に、しこたま飲んで参りました故、最早やそれには及びませぬ。」

文

「左様でもあらうが、折角半遺したれば、是非に一口過すがよい。」

義

「常なら善んで頂きますれど、是から息切れが致しましては、いさよ申す戦場にて、何の御役にも立ちませぬ故、平に御免を蒙りまする。」

文

「これより戦場へは程近し、これが最後の小川なれば、先づく此所で過すがよい。」

文

「左様なれば御残りを、頂戴致すで御坐りませう。」

文

ト柄杓を受取り、一口飲むで、馬に向ひ。

文

「こりや篤、殿の御遺しなされた水ぢや、有難く頂戴せし。」

文

ト残りの水を口にかけて遣る。

文

「それにて勢ひ復しつらむ、いで又是より一走り、石橋山に赴かむ。」

文

「さア〜これから御進發ぢや。」

義

ト馬を引出し、義忠を助けてこれに乗せる。

文

「こりや文三。」

文

「へ〜何ぞ御用に御座りまするか。」

義

「此所は函根への追分ぢやの。」

文

「左様に御座ります。」

義

「我はこれより右に取り、石橋山に参る程に、爺いは左を函根に出で、

文

間道傳ひに相模なる、屋形へ直ちに立歸れよ。」

文

「すりや何んどおツしやりまする、爺いに此よりお暇を、給はるので

義

御座りまするか。」

文

「如何にも只今勧めたる、柄杓の水は別離の盃。」

義

「何、何をおとぼけなされます。」

文

「興一決してとぼけは致さぬ。」

文

ト横笛りの合方に成り、義忠馬上の儘、文三に語る。文三はしっか

義

りと手綱を握りて見上げて居る。

「我運好くも先鋒の、御推薦を蒙りて、大場股野を仕留よと、御大将より御言葉賜はり、三百餘騎の人々に、果報者よと羨まれて、漸くこれまで参りしが、御慈愛深き父上の、私しならぬ君の爲め、忠義に凝つたる御眼にて、我を御撰みなされしすら、其の場に於いて彼此ど、早や噂する人の口々、不幸にして討損じ、おめおめ敵を逃しなば、此身の耻辱は言ふも更なり、それ見よ縁故の致方、岡崎四郎の鬱氣顔、見て笑はんと立騒ぐは、今より知れて無念なり。素より武士と生れし身の、生きて歸らん心を抱き、戰場に出る者はあらねど、別きて今度の合戦は、源平勝負の運だめし、一家浮沈の境とて、重き此の身の役目は一入、十に十まで討死の、覺悟定めし義忠を、剋陣あるは今日か、翌日か、指折盡して母上や、妻の知らでや我を待つらむ、さ、頼むは此所ぞ文三家安。

ト床の合方に成り。

義

「これより直様岡崎へ、急ぎ歸つて義忠が、討死と覺悟を極め、爺と此所にて別れたと、好く有様を語つて呉れよ、義忠は先陣承はり、喜び勇んで討入りしと、委細を好く語つて呉れよ、爺をのけては此事を、頼まむ人のあらざる故、無理か知らねど此路を、左に取つて函根越、問道傳ひに歸つて呉れよ。

上へ言へど手綱に縋りつき。兩手放たぬ家安が。落る涙を拂ひかね。

ト文三手綱を放たず不承知の思入。

「さうりや一應、御尤もでは御座りますれど、佐殿の御爲めに、打死するとおツしやるも、爺が殿に御つき申し、共々斬死致すのも、言はいづれも主の爲め、忠義に二つは御座りませぬ。殿は今年二十五歳、爺は最早五十四歳、未だ御二歳の初めから、親御に代りてお育て申し、夜は夜通し胸に抱へ、晝は一日肩に乗せ、御泣きなされば爺も泣き、

喜び給ふを見る時は、やれ嬉しやど此方も笑ひ。身を粉に碎いて仕へしも、早く成人をそばして、天晴立派な大將と、人に仰がれ給ふのを、大きな顔して見たいばかり。育てた者は此爺ぢやと、何處の陣へも召連れられ、武者の揃うた其中へ、御供をしたいが望みで御座る。功名なすを見て居よと、勇立ッたる御言葉を、聴くためにこそ世にのこれ、私はこれから討死する、死んだと家に傳へよとは、そんな冷めたい御言葉を、入れる耳は御座りませぬ。

上へ、理の當然と思へども、共に殺すは不憫やと。わざと義忠聲荒らげ。「やア分らぬ事を言ふ奴かな。」

ト横笛の合方

「死後に一點の思を留めず、心を安く討死と、度胸を定めて後にこそ、思ふが儘に働き得るなれ。好し又汝を戰場へ、伴ひ行かん其時は、文三は如何に、爺は今、誰と刃を交へ居るかと、つひくそれに心を引

かされ、自然に勇氣の衰へて、未練の最後を遂ねばならぬ、殊には我も病後と言ひ、向ふは名にし大敵なり、彼に勝つとも我死せむ、負れば不説死ぬる身の、迹に遣りて我家を、守もらむ者は誰なるぞ、爺をのけては他に無し。

「他に無とは申されませぬ、迹より参る其中に、三郎丸や然るべし、弓引く技は斯くこそ射れ、馬に乗るにはかく馳れど、教へし殿を只一人、しかも病後の若武者を、如何で見捨て歸られませう。

「我に教へし昔を語り、左程に思うて呉れるなら、迹に遣せし二人の幼児、これを我どとはぐくみて、岡崎佐奈田の兩家を繼し、與一の子息に強者ありと、言はれる様に致して呉れ。

「厭で御坐る。
「聴分けなし此所放せ。
「何條放し申すべき。

「えッ言ふ内時刻が遅れるは。」

上へ一鞭當つれば。跳上る。馬に引れて。二足三足。

ト文三馬に釣れて二足三足進む。

「鶯目我ぢや〜、行くな〜。」

「えい放さぬか。」

「いッかな放しませぬ、鶯ですら御供をするに、人間の此爺が、お別れ申す道理がない。」

「如何程言うても分らぬか、言葉かはすもこれまでなるぞ。」

上へ争ふはづみに。ぶツつりと。手綱は切れて。

ト手綱切れて文三倒れる、義忠は一散に上手へ這入る。文三起上りて手綱を持たるまゝ見送る。

此模様雨軍ドンデヤンの鳴物三重にて幕。

○四幕目 石橋山合戦の場

本舞臺一面の平舞臺。正面浪板、向ふ海原遠見の書割。一面に砂路の布を敷き、上下蘆原にて見切り。都て早川尻海岸の体。爰上の方に岡部彌次郎忠清、甲冑好みの拵へにて立掛り居る。下手平氏方の雑兵大勢、立掛り居る。雨窓を下し、浪の音に遠寄を冠せ、幕明く。

「今日は八月二十三日、空一面に掻曇りて、今にも雨が降りさうなれば、如何せ闇夜の亂軍に、敵も味方も見分け難し。一日過して明朝より、戦はんとの議ものりしが、三浦の黨の敵に加はり、威勢を添ゆるに至りなば、味方の不利此上なしと、儲てこそ不意に今宵の進撃、随分無三に切入て、無二の功名致すがよいぞ。」

一 「委細承知。」

大勢 「致して御坐る。」

彌

「相成る可くは人目に付く、物具の表を取去り、巳の姿を敵に見られず、竊かに退き、進む時は、大衆と見せ、威勢を張るべし、我が甲冑は黒皮威、神變不思議の働さには、此扮装に限り居るぢや。」

ト此所へ上手より、股野五郎景尙、長尾新五爲景、同苗新六定景、甲冑好みの拵へにて出る。

「参られしは誰人なるか。」

「其聲は岡部殿か、股野五郎景尙で御座る。」

「長尾新五爲景。」

「新六定景も一所で御座る。」

「此闇さでは合戦も、一入難澁で御座るの。」

「如何にも左様には相違なけれど、勇しき組打は、夜合戦に多ければ、手剛き敵に渡合ひ、随分面白い事で御座らう。」

「敵の先鋒は何奴なるか、首骨の太くして、刺さたへのある荒武者と爲

彌 股 定 爲 股 彌

爲

そ望ましけれ。

「言はゞ鳥合の軍勢なれば、我等が望の當の敵、數る程も御座るまゝ。」

ト此所へはたゞにて、向より雜兵走り出で、直ぐ本舞臺に來りて。

「いづれも此にお出ありしか、只今源氏の先鋒とて、佐奈田與一唯一騎、驀地に駈入りて、程なく此所へも参るで御座らう。」

「何、佐奈田與一が此所へ。」

「先陣受けて参るとな。」

「物々しや小冠者義忠。」

「唯一打に打取り呉れむ。」

「いや死物狂の一騎武者、迂濶に手出は致されぬ。」

「場所を計りて袋の鼠。」

「弄り殺しに。」

「致して呉れむ。」

定 雜 股 彌 爲 定 股 彌 爲 皆

股

大勢
心得た。

「いづれも油断ある可らず。」
トこれにて股野先きに岡部、長尾兄弟、上手へ這入る。雑兵大勢残りて居る。此所へドンチャンにて、向ふより佐奈田與一乗馬にて走り出る。花道にて留り。

義

「源氏世を取給ふべき軍の先陣を誰とか思ふ。音にも聞つらん目にも三浦介義明の弟、本は三浦悪四郎、今は岡崎四郎義實が嫡子、佐奈田與一義忠なり。生年廿五歳、我と思はん人々は、出迎へて勝負致せ。」

ト大きく言ふ。直ぐ本舞臺に來り、雑兵を蹴散す。これより亂軍の打合、大立廻りに成り、戦ふ處へ、向ふより文三家安、駈込み。同じく立廻りの中に這入る。ト、雑兵を兩方に追拂ひ、双方一息して、思はず顔を見合せ。

文

「殿か。」

義

「爺か。」

文

「與一様か。」

義

「文三なりしか。」

文

ト知らず、義忠馬より下りる、互ひに取絶りて。

義

「好くぞこれへ参りしよな。」

文

「たとへお呵り受くるとも、更に厭はぬ爺の決心、お跡を追うて参りました。」

義

「今は何をか申すべき、我大場と組むならば、汝は股野と組合ふべし。」

文

「殿、股野と組み給は、我は大場と組み申さむ。」

ト此所へ又以前の軍勢出で来る。これにて又立廻り劇しく、別れに成りて、文三は上手に這入る。義忠は下手に雑兵を追拂ひ、馬を蘆原に繋ぎて一息爲し、息切苦しき思入。本釣鐘を打込む。此處へ以前の岡部彌次郎、蘆原の影より忍び出で、無言にて義忠に

義

切りつける。驚きながら身を替して。

「何奴なるか卑怯千萬、人間ならば名のあらむ、武士ならば名乗もあ
るべし、誰そ、誰そ、何奴なるぞ。」

彌

「岡部六彌太忠澄が實弟にて、同苗彌次郎忠清とは我事なり。今事々
しく名乗すとも、耳ある者は聴きつらん、大場勢の其中にも、打物取
ッては我隨一、組みひか、來れ、腕の力は十五人、手玉に取られな、
蹴飛ばされな。」

義

「言ふたりなく、岡部彌次郎忠清とや、鹿待つ處に狸武者、人非人
の命を取るは、好ましからぬ殺生ながら、捨てぬおかれぬ戦場の、掟
どわきらめ素ッ首を、丁と一打落して呉れるは。」

彌

「其高言の舌の根を。」

彌

「我より留めむ。」

「なんの和主に。」

兩人

「事々しや。」

ト兩人抜つれて切結び、劇しき立廻りあり。ト、義忠、彌次郎の肩

より大袈裟にわびせる。彌次郎たちろぎながら苦しむ。義忠構へた

る儘見込む。

此模様早めたる合方にて道具廻る

本舞臺眺への大道具。上下岩山の張物。中程少しく下りて同じく岩山の

張物、仕掛にて人が轉がり落る事あり。上手岩山の上に柵矢來。舞臺前

半分砂路の布、迹一面波布、諸所に岩石の張物、花道ぎはに逆茂木。都

て石橋山海岸の体、此所に本雨を降し、浪の音にて道具留る。

ト本釣鐘を打込み、床の淨瑠璃に成る。

上へ打寄する。浪に巖の碎かれて。音物凄き磯傳ひ。義は金鐵の義忠

が。忠と孝とに討死と。覺悟定めし刃には。當りかねてや。逃散

る寄手。長追ひしてぞ。來りける。

ト詔への鳴物にて、上手より大場方の雑兵、追散されて走出る。迹より義忠馬乗にて出で、一寸立廻りてト、皆々逆茂木を破り、向ふへ一散に逃入る。義忠追はうとして、馬逆茂木に驚き、進み得ぬ仕打。

「やア不潔かへせ、僅か一騎に追ひまくられ、浮足立ちたる見苦しき、引返して勝負せよ〇おーい〜」

ト義忠思入あつて。

「言甲斐なき奴原かな、最前岡部を討取りてより、武者らしき敵に一人も出合ず、恰も無人の境を走り、獨勝負を爲す如く、張合の無き事共かな。いでや是より敵勢の、群がる方へ志し、目ざす二人に逢ひたし物ぢや。」

上へ、篠突くばかり降りしきる。雨に喉を濕はして。又も敵地に乘入らむと。進みかけた後より。股野五郎聲を掛け。

ト岩山の上なる柵の間より股野五郎出で。

「佐奈田與一義忠待ツた。」

「何んど。」

ト詔への合方に成り。

「聞にも知れるは駒の白茸毛、裾金物は潮にきらめき、肩白の鎧に白覆綸の母衣懸けたるは、源氏の先鋒、佐奈田與一義忠と見たが非が目か。」

「誠に我は義忠なり、して〜汝は何者なるぞ。」

「我こそは、昔後三年の軍に出羽國、仙北郡金澤の城を攻る時、十六歳にて先陣爲し、右眼を射られて更に屈せず、當の敵を其場に殺して名譽を末代に遺したる、鎌倉權五郎景政が末葉、大場三郎景親の弟にて、股野五郎景尙なるは。」

「扱は汝が噂に聞く、股野五郎景尙なりしが、左るにても笑止や、軍

股 義

股

股 義

義

義 爲 股 義 爲 股 爲 義

「来たげ文三か。」

「いや長尾新五爲景だ。」

「好くぞ來られた長尾殿、只今景尙、義忠と組合うて御座るは。」

「何、義忠と組まれしとな。」

「上が股野景尙なり、下なるは佐奈田で御座る。」

「否々上が奈佐田で下が景尙。」

「いや敵は下なり、味方は上ぞ。」

「眞の闇夜に風雨劇しく、打寄す浪にまざらされ、いづれを敵と分さ

がたし。

「情けなし長尾殿、鎧の毛にても搜して見給へ。」

「それよ。」

上「さぐり寄んと近着く新五。與一は此所ぞと氣合を計り。發矢とば

かり蹴飛ばしたり。」

ト近寄る新五を義忠蹴飛ばす、氣を失つて倒れたる間に、又も鞘を破らんとあせる。

上「折柄又も馳來る新六。有無も言はせず組付きて。障る鎧に判別爲

し。束も通れと貫けば。」

ト上手より新六定景出來り、義忠に組付き、鎧を搜りて敵味方を別

ち一息に義忠の脇の下を刺す、義忠片手を石の上につき、苦しき

仕打。

上「流す血汐の初紅葉。手形石とて後の世に。傳へ傳へて。」

ト義忠がツくり落入る。股野は組敷れたる儘、新六は血刀を捨て共

に合掌する。此模様知らせに付と道具幕を振落す。

○大詰 杉山臥木隱の場

本舞臺一面岩山の道具幕。

文

トドンデヤンの鳴物にて、上手より以前の文三家安、のり紅手疵を負ひたる拵へにて、雑兵四人を相手に立廻りながら出る。ドッ下手の方に追拂ひてきつと見得。

「殿はいづれにおはするや、佐奈田の殿はいづれにおはすや。」

ト四方を見廻はす、息苦しき仕打。トよるめきながら花道にかゝる。後より雑兵一人切ッてかゝる。振向きて睨むこれにて逃げて這入る。

文

「殿はいづれにおはするや、義忠様、與一様。」

ト此所へ又向ふより雑兵駆來りて、切りつける。一寸切結びて、直ぐ雑兵逃入る。

文

「殿やおはす、文三はこれに。」

ト又後より掛る、追拂ひて。

文

「文三はこれに候ぞや。」

茂

トよるめきながら向ふへ這入る。迹山おろし、禪の勤めにて、上手より前幕の公藤介茂光、息子狩野五郎親光、附添ひ出る。茂光歩行に苦しむ苦打。

「残念なるは味方の敗軍、先陣爲したる義忠の、股野五郎に仇れてより、入亂れての合戦も、天運未だ來らざるか、追捲られて總崩れ、我人共に浮足立ち、これまで逃げたる口惜しさ。いざ此所に踏留り、せめては味方の引揚げて、落のぶる頃合ひまで、殿なして防矢射ひ。」

親

「それにしても足場は悪し、殊に御大將を初めとして、北條岡崎其他の家族、大方は落のびたれば、仇矢を射るにも及ぶまじ、早や〜伊豆へ引揚給へ。」

茂

「此大きな体にては、共に走る事思ひも寄らず、空しく敵に追着かれ、名も無き者に討れむより、踏留ッて死ぬにしかず。」

親

「死に給ふのも時にこそよれ、先々此所を落給へ。」

茂

「否々、敵は次第に近寄りたり、我に構うて汝まで、此場に死なば、それをこそ、犬死とは申すなれ、其方一人生残りて、御大將に従ひなば、忠も立ち、孝も立ち、家も起り、名も揚らひ、急げ、急げ、五郎親光。」

親

「家も名譽も入る物かは、親を見捨てて子の逃るは、本朝初まつてためしを聴かず。何んとおほせなされても、御傍をいつかな去り申さぬ。」

茂

「其詞は恭けないが、幾度繰返しても、我は此場は立去らぬは。」

親

「さらば私も立去りませぬ。」

親

「如何して立去らぬか。」

茂

「何は兎もあれ矢頃の好き、足場を見出すそれまでは、さア此肩に御手かけられ、一先御進みなされませ。」

茂

「ぬい是非もない事ぢやなア。」

ト肩に縋る、あまりに重き故、親光腰潰れて倒れる。又肩に縋らせ

る、又潰れる。又肩、又潰れ、兩人氣の揉る仕打ありて、ト下手へ這入る。

迹大薩摩に成り。

大それ。夜來の大雨未だ止まず。掣雷空を貫きて。鬼神手づから打

振ふ。劔の光かくやらひ。奔雷おとろ鳴響き。山彦叫ぶ鯨波の聲。

梢は裂けて。杉山の。鶯の岩屋の底深く。碎けて落つる源の。水

の行衛の武者七騎。實にも臥木の助けとて。危うかりける。次第

なり。

ト一抔にて電氣をつかひ、雨車、雷鳴、知らせに付き道具幕切ッて

落す。

本舞臺一面の平舞臺。後ろ峨々たる岩山の張物。真中少しく上に寄せて
眺への臥木、大きな虚口、此中に人の隠れる事あり。上下岩山の張物
にて見切り、諸所に杉の立木をあしらひ、臥木の前に大きな岩の張物。

捨石などよろしく、都て杉山奥臥木前の体。茲に右兵衛佐頼朝初め、土肥次郎實平、同彌太郎遠平、新開次郎忠氏、土屋三郎宗遠、岡崎四郎義實、安達藤九郎盛長、各々捨石に腰を掛けて居る。

頼 木玉入りの合方に成り。

「軍の習ひと云ひながら、脆くも敵に打破られ、暫くこれまで落延びたれど、行手々々を取圍まれ、路頭に迷ふ主従七騎、誠に残念至極なるぞ。」

土 「此程よりの長雨に、相摸、酒勾の川々は、満水爲て渡るにたたく、それ故味方の路をたれ、跡より續く軍勢なく、終に衆寡敵せずして、此敗北を見る事も。」

達 「人の力の天に及ばず、悪運強き大場勢、勝に誇りて追來るとも、如何でか長く保つべき、今にぞ思ひ知らして呉れん。」

新 「昔范蠡會稽の恥を雪ぎし例もあり、曹沫三敗の恥辱に死せず、

魯國の差を報せしも、皆堪忍びし故と聽く。

宗 「一先君の守護爲して、安房か、上總のいづれへか、舟にて渡り再舉を計らむ。」

藤 「それは行末、差當りて、火急の大事は此圍みを、切開きて打出るか、但しこれなる臥木の洞に、身を潜めて逃れむか、此二ツの評定なり。」

岡 「昔聖徳太子には、佛の道を興さんとして、守屋大連と戦はれしかど、軍勢少き其爲めに、敗北なして木の虚に、身を隠されたる事もあり。」

頼 「誠に左る瑞相も、數へ出さば澤なるべし。祖先奥州征討の砌、官兵多く失ひて、纔か七騎と共々に、山籠して逃れ給ひ、千苦萬辛の其後に、遂に逆賊を打亡し、四海を安んじ給ひしとや、それこれ思合はずれば。」

岡 「人數も丁度七騎の落武者。」
頼 「これなる臥木に身を忍び、時節を待つと。」

皆々

「仕つらむ。」

ト頼朝先きに、皆々臥木の中へ這る。

迹大小入り誂への合方に成り、向ふより梶原平三景時、甲冑、附太

刀、好みの拵へ、弓を小脇に搔込みて走出る。直ぐ本舞臺に來りて、

四方を捜し、ト思入あつて臥木の中に這入る。迹陣鐘太鼓ばた々

々に成り、大場三郎景親、長尾新五爲景、其他甲冑の武者大勢、本

花道より出で。股野五郎景尙、長尾新六定景、其他甲冑の武者大勢、

東花道より出で。双方直ぐ本舞臺に來たり、真中にて行逢ひ

「兄者人。」

「弟。」

「三千餘騎、手配り爲し、蟻の這出る穴もなく、山の四面を取巻き

れば、抜道無しと思ひの他。」

「東西二手に引別れ、草の根分きて尋ねれど、頼朝主従七人の、影も

姿も見出さず、汝と此所にて出會ふとは、誠に不思議の事共かな。

「思ふにこれは遠くは落まじ。」

「此山中に潜み居らん。」

「上は繁れる梢より、下は洞空の底をうがち、搜出さでおくべきか。

「それにしても訝しきは、これに横はる臥木の洞穴、いで此中を捜し

て呉れん。」

「いや兄者人、御待ちなされ、此五郎が這入るで御座らう。」

「いや我より先に、這入るでわらう。」

「誰彼と言はんより、さらば二人で這入ると致さう。」

「それ好からん、續け五郎。」

ト兩人這入らうとする。

「御兩所、それには及ばず。」

ト中より梶原平三、蜘蛛の巣を甲冑に附けて出て來る。

爲 定 股 大

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 股 大 股

大 「や、誰かと思へば、梶原平三。
股 「如何して其所に。」
皆 「居られしよな。」

梶 「我思ふ仔細わつて、御兩所とは路を違へ、隅々隈々尋ぬる内、はしなく見出すこれなる臥木。扱てこそ怪しき虚口、頼朝主従此中に、潜み居るに極まつたり、景時一人功名して、恩賞に預からむと、喜び勇んで這入りしに、居つたはしく、しかも大きな蝙蝠の、人に驚き飛び來る他、これ此様に蜘蛛の巢の、ひつしどばかり組付きて、繩目の耻を受けて御座る。」

大 「すりや何んと申さるゝ、これなる臥木の其の中には。
股 「誰も居らぬと。」
梶 「申さるゝか。」
大 「今申したる其他には、蟻一匹も居り申さぬ。最前樵夫の物語りに、

定 爲 大 股

土肥の眞鶴の濱邊を指し、七八騎落武者の、走行さしと申す事、定めしそれに相違あるまじ。

「いや其樵夫より拙者も、落武者の事承はり、早速跡を追掛けしが。
「似もつかぬ端武者輩、甲を脱いで降參致し。
「今陣中に繋いで御坐る。
「されば他に隠れる處、此臥木より他になし。
「今一度拙者が、伏木の中を搜して見む。
ト這入らうとする、景時これを隔て、刃に手を掛けながら、きつと見得。」

梶 「やをれ無禮なり、五郎景尙。
ト合方さつぱりと成る。
「當時平氏の御代にして、我は大場の縁者ならずや、源氏軍に敗北爲し、散々に落行くを、誰が見逃しに致すべきや。大將の頸打取つて、

これを平家の見参に入れ、此恩賞を礎に、世に出でんとこそ思ふなれ。再び此虚に入り、捜して見むと申さるゝは、此柅原を疑ひ給ふか、二心ありと思ひ給ふか。

棍 股 『二心ありとは申さぬぞ、物には見残しと言ふ事あり、闇黒なる虚の中、貴殿が心着れずして、出られたかど存せし故、それで斯様に申したのだ。

棍 『いよ／＼以て奇怪至極、暗しと雖も伏木の中、高の知れたる虚にて、見残す事のあるべきや。心着かすに出たとならば、我を白痴に言ひ給ふか。

棍 股 『決して貴殿を白痴とは申さぬ。』
棍 『白痴と言はで白痴と爲し、曇らぬ我に二心ありと、疑はれたる残念さ。誰人にもわれ這入ッて見よ、我何の面目あッて、をめ／＼傍に見て居るべき、指違へて最期を遂げむ。』

股 ト大岩の上にとツかりと腰を掛け。

『指違へんとは面白し、斯く角張りて言ひ出るを、圓く受けるは大不得手、一たん股野が思込み、目星を着たる此虚、捜出さいでおくべきか。』

棍 股 『見事貴殿が捜さるゝか。』
『おんでもない事。』

大 トツカ／＼と近寄る、大場これを隔てゝ。
『こりや待て弟、押して這入るは無禮なり。これ程までに申さるれば、よもや虚言にもあるまじ。

棍 『決死、虚言を申さうや。』
ト立ッて弓を以て虚の中を搔廻はす。仕かけの糸にて白鳩を二羽日覆へ引きて取る。

棍 『あれ／＼今拙者が、弓を以て此虚を搔廻せしに、中より出る白鳩二

大 梶 股 爲 定 大

羽、これを以ても虚には、人の居らぬ事明かなり。

「實に道理、いよく此中には居らざるべし。」

「彼此爲す間に、他の方を捜しに歩くが上策なり。」

「最前捕へし端武者を責め、白状さするも一ツの手段」

「成程それも一理あり。」

「疑團解けし上からは。」

「少しも早く〇それ。」

トこれにて大場兄弟、長尾兄弟、先きに大勢、向ふへ這入る。迹に

景時思入あつて、同じく向ふへ這入る。本釣鐘を打込み、雨窓を

開き、合方替りて、虚口より盛長顔を出し、様子を窺ふ。ト以

前の頼朝初め、皆々出で、向ふを見込み。

「既に危き其所を、梶原が情けにて、此場を助かる喜ばしさ。」

「これも一重に信仰爲す、八幡菩薩の加護なりしか。」

岡 頼

土 新 遠

宗 盛 頼 岡

源

皆

皆

皆

皆

皆

皆

「又もや彼等の來らぬ内。」

「敵の去りたる跡を踏み。」

「忍びくりに落行きて。」

「真鶴崎より乗船爲し。」

「安房の洲崎をこゝろざし。」

「茲に再び白旗を、翻すべき時運を待たむ。」

「いぎ御供。」

ト皆々居並ぶを木の頭

「仕らむ。」

ト一同平伏する、頼朝向ふを見渡す。詭への鳴物にて。

拍 子 幕

(大團圓)

祐親は情感に訴へて頼朝の奮起を促し、文覚は意志に由りて頼朝の企業を助け、景時は智力に借つて頼朝の危難を救ふ。上段は情感、中段は意志、下段は智力。これを代表したる人物の、各々當劇の主人公の如くなれるは、全舞を通じての主人公たる頼朝を描きて、支葉に重きを置きたる感なきにあらざり、一場々々に力を注がざる可らざる舞劇の筋立としては、誠に已むを得ざるに出づ。

源 義 仲

○序幕 中權頭屋形の場

本舞臺三間の間一面の平舞臺。向ふ好みの襖。上下一間折廻し二枚の開き戸。縁の蒲縁を敷き、都て中三權頭兼遠館の体。爰に家臣△○□◎

鳥帽子半素袍にて扣へて居る。此見得合方調べにて幕明く。
 △「如何に方々、木曾山中に埋れて、一生老朽るかと存せしに、豫て鍛へし腕節を思ふ存分ふるへる様な、如何やら氣運に向ふた様子、なんと喜ばしい儀では御座らぬか。」

○「左様々々、承まはれば關東にては、佐殿既に旗上せられ、一度相撲に敗れたれど、又盛りかへして數萬の大軍、彼の富士川では戦はぬに、敵の奴輩逃げしとやら。」

□ 『此期に乗じて義仲公にも、平家追討の軍勢を、少しも早く催され、都の方へ急に攻入り、再び王城守護の職、源氏の御代に致されんを、只管願ふ我々共。』

◎ 『及ばずながら合戦の、其場へのぞめば一命を、君に捧げて死物狂ひ、木曾侍士の手練のほどを、都の武士に拜ませて、其肝玉を挫いで呉れん。』

△ 『それに就きて氣遣はしきは、六波羅より俄かの御使者。』

○ 『何用なるか未だ知れぬぞ、若や今度の企謀を。』

◎ 『未然に察して問罪の、其使者にてはわらざるか。』

△ 『孰に致せ油断は出来ず、イザと言はゞ數成らぬ。』

○ 『我々なれど躊躇は致さぬ、奥へは通さず此場より。』

△ 『追ッかへして。』

皆々 『遣り申さん。』

大 ト上手より大室小彌太、烏帽子素袍小さ刀にて出来り。

大 『いづれもには御苦勞に存ずる、未だ遠見に参られたる、落合殿は歸館無さか。』

△ 『未だに以て歸館の様子は、一向に。』

皆々 『御座りませぬ。』

大 『左すれば未だ六波羅よりの、使者には未だ見えぬと思はる。何んにしても當家に取りては、由々しき大事に相違なし。義仲公を初めとして、兼遠殿にも嘸かし御憂慮。御同様に心勞な事で御座る。』

大 ト中の舞に成り、向ふより落合三郎、烏帽子素袍小さ刀にて出来り

大 『いづれもには之に御在せしか、都よりの使者の一行、福島の棧道まで参りたるを、拙者沓掛にて遠見致し、直様御注進に歸館致せり。』

大 間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。

大 間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。

大 間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。

大 間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。

大 間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。

大 間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。

大 間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。

落

大 『いづれもには之に御在せしか、都よりの使者の一行、福島の棧道まで参りたるを、拙者沓掛にて遠見致し、直様御注進に歸館致せり。間もなく入來と存じらるれば、出迎ひありて然るべし。』

大 落合殿には御苦勞千萬、シテ使者の役人は、何者にて候ひしか。
 大 遠見なれば確固とは知れぬぞ、白髮の老武者ゆゑ、御奥で聞かば知
 れるで御座らう。

大 何は然れ此由を、少しも早く。
 兩人 御しらせ申さん。

ト正面の襖の内にて。

義 『あいや通知に及ばぬ、義仲それへ、参るで有う。

ト好みの合方にて、木曾冠者義仲、好みの烏帽子直垂にて荒々敷く
 出る。これを留める心にて、巴御前、垂髪鬘、好みの裃。今井四
 郎兼平、烏帽子素袍小刀にて従ひ出る。兩人下に居て左右より義
 仲の袖を控へる、家臣皆々兩方に分れて住ふ。

兼 義 『留めるなく、留立致すな。

『又しても吾君には、日頃よりの御性急、これへ御出座ある可らず、

巴 委細は臣等に御一任ありて。

『使者のをもむき何事か、一應父が聴取りますまで、奥にて御待ちあ
 そばしませ。

義 『何條それを相待たんや、聴かずと知れた義仲が、頼朝と心を合せ、
 木曾に旗上げ爲すやも知れずと、夫を憂ひて六波羅より、我に難問す
 るにやあらむ。左なくば權頭を上洛させ、人質に取るかのいづれかな
 り。先んずれば人を制す、未だ軍備こそ整はざれ、露顯に及びし上か
 らば、今日只今旗上するぞ。先づ最先の血祭に、使者の素首、撃落さ
 ん。

兼 『それが所謂御性急、御大將たる身を以て、軽々しく使者を斬ると
 は、以ての外の御所業なり。

大 巴 『未だ軍備の出来ませぬ内は、まづ〜忍んで御座あるやう。
 『臣等を初め一同に。』

落 「御願ひ申し。
皆々 「上奉る。

「やあ二言目には其方等は、我を軽々しいと申すよな。重々しく偽曾釋して、大將振れば好いと言ふのか。流るゝ水は留めがたいぞ、思立つては心の儘に、致さにや成らぬ吾氣性を、知らぬ其方等でもあるまい。

兼 「すりや如何あつても吾君には。

大 「使者を待受け此處で。

義 「御成敗。

皆々 「成されまするや。

義 「おう重ねて留めるな。

權 トきつと言ふ。皆々是非なき思入れ。此時上手にて。

權 「あいや、如何あつても御留め申さん。

義 「何んど。

ト合方變りて上手より、中三權頭兼遠、烏帽子素袍小さ刀、古けたる拵へにて出來り義仲の下手に住ふ。

義 「今其方の言葉なれど、留めずに我の存分通り、致させ呉れよ。權頭。

權 「いや成りませぬ義仲公、君には越後に平家の勇將、城太郎資永が、五萬餘の大兵を以て、城を構へ、砦を設け、イザと申す急變に、備へてあるを御存じないか。

義 「それは疾に存じて居るわ。

權 「然るに、今平家よりの、使者を、此場で斬殺し、直様義兵を起し給はんにも、未だ味方ぞと臍を固め、心を傾けたる將卒の、有るや無しやの知れざに、何として城の大軍、引受ける事相成りませうや。

義 「さア夫れは。

權

「此所は一先づ隱便に、使者を歸すに如く事なし。拙者より二心なきを、言開き、次第によりては上落致し、尙六波羅の人々をも、辯舌にて説付け申さん。其間に合戦の要意を急ぎて、充分整ひし曉に、討つて出るも遅からず。悪しき事を申さねば、先づ〜此場はをさまり給へ。」

義

「其方が左様に申すのを、押して聽かぬも悪しかるべし〇とは言へ使者奴は。」

義

ト思入あつて。
「斬りたいなア。」

侍

トどつかと座わる。直ぐバタ〜に成り、向ふより侍一人走出で花道にて。

兼

「はッ申上ます。」

侍

「何事なるぞ。」

侍

「六波羅よりの御使者には、間もなく御着に御座りまする。」

兼

「おう承知致した。」

侍

「はッ。」

義

トばた〜にて侍引返して這入る。

巴

「使者を斬らぬと極つた上は、最早や出迎ひするにも及ばぬ。」

義

「君には奥へ御入りあそばせ。」

義

「とは言ふもの。」

權

ト立かゝる、權頭これを押へて。

兼

「先づ。」

皆々

「入らせられませう。」

權

ト唄に成り、義仲先きに巴御前、上手に這入る。迹見送りて。

兼

「彼此入來に間もあるまじ。」

兼

「これにて出迎へ。」

大落「仕らむ。」

ト皆々居並ぶ。直ぐ向ふにて。

侍「御入り引。」

ト中の舞にて、齋藤別當實盛、白髮鬘、附髻、烏帽子直垂の拵えにて出来り、花道にて留る。權頭驚きたる思入あつて。

「や、六波羅よりの御使者とは、實盛殿にて有りたりしか。」

「如何にも齋藤別當實盛、使命を受けて参りたり。役目なれば御免被下れ。」

權「ト本舞臺に來り、好き處に住ふ。」

「遠路の上に信濃路は、山ばかりなる難道を、御役目とは申しながら、御苦勞至極に存じまする。」

「早速ながら御使者のおもひき、我々親子に仰せき被下るやう。」

權兼「願はしむ。」

兩人「存じまする。」

實「其次第餘儀でも御坐らぬ、和殿が幼少の時より、引受けて、今日まで、

でに、そだて上げたる、帶刀先生、義賢の遣子、駒王丸、今は木曾

冠者義仲、平家に反きて頼朝と、心を合せ、旗上ある由、連りに噂を

致す者あり、其實否を正さん爲め、和殿を都に召上せ、宗盛卿の御前

にて、一應御取調べあるべしとの上意、萬一これに従はず、上洛致さ

ぬとあらんには、二心と見なして、直ちに討手を向けるとおもひ

き。只是ばかりの使命で御坐る。」

權「すりや拙者に上洛を命せられ、若し従はぬ其時は、謀叛人と見なさ

れて、討手を差向けらるゝとな。」

實「又尋常の上洛あり、六波羅の御前にて、二心なき明りを示して、立

派に申開きの相立ちなば、素より別に仔細はあらず。」

權「申開きの立たざる時は。」

兩人「存じまする。」

實「其次第餘儀でも御坐らぬ、和殿が幼少の時より、引受けて、今日まで、

でに、そだて上げたる、帶刀先生、義賢の遣子、駒王丸、今は木曾

冠者義仲、平家に反きて頼朝と、心を合せ、旗上ある由、連りに噂を

致す者あり、其實否を正さん爲め、和殿を都に召上せ、宗盛卿の御前

にて、一應御取調べあるべしとの上意、萬一これに従はず、上洛致さ

ぬとあらんには、二心と見なして、直ちに討手を向けるとおもひ

き。只是ばかりの使命で御坐る。」

權「すりや拙者に上洛を命せられ、若し従はぬ其時は、謀叛人と見なさ

れて、討手を差向けらるゝとな。」

實「又尋常の上洛あり、六波羅の御前にて、二心なき明りを示して、立

派に申開きの相立ちなば、素より別に仔細はあらず。」

權「申開きの立たざる時は。」

兼

「言すと知れた父上を、人質に取る平家の計略。」

ト言ひかける、權頭キツと睨みて。

「何を申す、扣へて居よ。」

ト思入ありて。

「委細承知仕つりました。」

「すりや上洛あるべしとな。念なう素直に御受ありて、拙者も満足な

り、是にて役目も無事に済みしが、扱て珍らしや兼遠殿。」

「絶えて久しき實盛殿。」

「御身も我も年古りて。」

「白髮頭の今日の對面。」

「互ひの頭に雪こそ積れ。」

「積る話も多ければ。」

「役目の他に打解けて。」

權

實 權

實 權

實 權

兼 權

「奥でゆるりと物語む。〇これ兼平御案内致せ。」

「はッ。」

ト立ちて兼平、上手の襖を明ける。

「これが和殿の御子息か、扱て立派な若者かな、義仲公にも御成人、定めて老爺を。」

ト立上るを道具替りの知らせ。

「忘れて御坐らう。」

ト此模様合方にて道具廻る。

實

實

〇同 奥殿の場

本舞臺三間の間少し上へ寄せて中足の二重。檜皮葺の庇、本縁付、階段あり。正面好みの襖、上の方一間奥へ下げて續き屋体、塗骨の障子、下方縁側の突當りに白木の開き戸、出這入あり。下手網代垣にて見切

り。後山々の書割。平舞臺庭石立木などよろしく、總て權頭館與殿の体。合方にて道具留る。

ト侍女二人襖を明けて出來り、敷物など上手好き處に敷き、座を設けて這入る。直ぐ開き戸を明けて、以前の兼平先きに、齋藤實盛、權頭兼遠出で、三人設けの席に住ふ。管絃の合方に成り。

實 『木曾はいづれも風景好く、居ながらにして山々を、見渉す處は又格別、ことには要害堅固にして、邸宅ながら城廓同然。』

ト思入あつて。

實 『此所に在住あるからは、心も自然荒々しく、都に見られぬ勇士を出すは又無理ならぬ事で御坐る。』

權 『何處に行きても深山幽谷、山水の景には富みたれど、土地廣からねば心まで、自然と狭く山猿の、世間知らずで困りまする。夫れは扱ておさ久々なれば。何は無くとも御酒一献。』

侍 兼 『申付けたる要意の品、早や〜これへ。』
『はア引。』

ト侍女二人、瓶子土器折敷など持ちて開き戸より出で、實盛の前に置く。

權 『表立ちては六波羅よりの御使者なり。私に取りては珍らしき客人なり。何ぞとは存すれども、山間僻地の悲しさには、何饗應すべき物もなく、近頃無念の至りなれど、責ては心を置き給はず。』

『ゆる〜御すごしわらん事、願はしう存升る。』

實 『いや〜此上の馳走は候はず、難有く頂戴致すで御坐らう。』

ト土器取上げて飲ひ事あり。木玉入の合方に成り。

實 『如何に兼遠殿、思出せば二十餘年の昔、久壽二年、師走の下旬、寒氣はげしき木曾山中。あれに見ゆる駒ヶ岳も、雪に埋れて只白く、岩をも碎く木曾川の、岸にも氷張り詰めて、行來稀なる棧道づたひ、吹

權 雪になやみて宿りさへ、求めかねたる旅の人。

「我は其時山狩して、多くの獲物に満足なし。郎黨連れて歸るさに、行合橋の此方にて、主は誰とも白雪に、裳笠染めたる二人連、一人は正しく女性と見え、一入歩行も苦し氣に、肌はだに包める稚兒も、凍へやしつらむ泣く聲の、木玉こたまに響ひびきて悲かなしさ深ふかし。

實 「すれ違ちがひ様見合すれば、天てんの助けか其人は、之これよりたよりて行かんとする、中原三郎兼遠殿。

權 「聲掛こゑかけられて心づけば、實盛殿さねもりのみと一人の女性。

實 「抱かかへし若子わこは帶刀先生たてわきせんじやう、義賢殿よし賢のみのわすれがたみ、其時二歳の駒王丸こまわうまる。

權 「先づ身みが館たちへ案内あんない申し、それより段々仔細だんぐしさいを聴けば、義賢公よし賢のこうの生害しやうがいより、一家没落いつかぼつらくの其有様。

實 「義平殿よしひらののみが仰付おほせつけに、東西ごうざい知らぬ稚兒をまなこの、駒王丸こまわうまるまで殺ころせよと、過度あまり

の無慈悲むじひに左さうも成ならず、竊ひそかに助けまゐらせしは、重能殿しげよしのみの情なさけなり。

權 「吾手わがてに置おきて育うて、は、見出みいだされんも計はかられずと、重能殿しげよしのみの苦心くしんの末すえ、いづれへなりと連行つれゆきて、隠かくしまつれと頼たのみしを、快こころよく引受ひきうけて、遙々木曾路はるくきぞちに來きたられしは、實盛殿さねもりのみの義心ぎしんなり。

實 「拙者うれがしそれを受次うけつぎて、則すなはち御身おんみに托たくせしが、夫うれより後のちは打絶うちたえて。拙者うれがし都みやこに行く時は。

實 「我われは吾妻あづまに歸かへりてあり、拙者うれがし在番ざいばんの刻ときには。我われ又木曾またきぞちに山籠やまこもり、文ふみの行來ゆきも斷たちたりしは。

實 「世よを憚はげりてわざとの疎遠そゑん。風かぜのたよりに恙つがなしと、只聽ただきくのみを力ちからにて。

實 「嗚な彼の君きみは御成人ごせいじんと思おもはぬ日ひとてあらざりしが。幸さいはひなりしは今度こんどの使命しめい。

實 權 『我から望みて参りしが。』

實 權 『扱て變れるは互ひの姿。』

實 權 『變らぬ物は。』

實 權 『互ひの交情。』

實 權 『昔がたりと。』

實 權 『成りしよな。』

義 『双方よろしく思入ある。此所へ、手の續き屋体より以前の義仲出で。』

義 『やあ珍らしや齋藤實盛。彼の時凍えて泣立てし、駒王丸は我なるぞ。』

實 『おう面ざし違はぬ父君其まゝ、御なつかしや義仲公、まづ〜これへ。』

ト喜ばしき思入。座を下りてゆづる。

義 『ゆるせよ通るぞ。』

ト椽側より通りて上手好き處に住ふ。合方變りて。

義 『今まで彼にて二人の話に、耳傾けて聽いてありしが、委しく知れたる幼時。』

兼 義 『拙者とても耳新しく、斯くとは初めて承はる。』

兼 義 『二十餘年の昔の有様、今眼前見る如く、いとなつかしく思ふなり。』

兼 義 『實盛まつた權頭、其方等の苦心は一方ならず、謝するに言葉を知らぬぞよ。斯くとも知らず最前は、只一筋に平家よりの、問罪の使者と思込み、ひら／＼として疳癬起り、斬つて捨てんと存せしが。』

兼 義 『父上御留め申さずば、思はぬ珍事と成りしやも存じられず。』

兼 義 『危き事にて。』

兼 義 『ありしよな。』

兼 義 『改めて實盛には、其時の義心の程、權頭には今日までの、養育一方』

權 ならざりしを、義仲厚く禮を申すぞ。

實 『其御禮より此後に、天晴源氏の正統ぞ、義賢公の御子なり。重能實盛兼遠等の、苦心の程も見えたりと、世にはやさるゝ名將と、成り給はんを相待ちて。』

實 『そののみ樂しむ老の身なれど、平家に仕へ六波羅の、役目を受けたる實盛なり。此口よりは申されぬと、倒れたる木は起すべし、埋れたる石は掘出し。』

權 『玉は磨きて朝日と共に、武名を天下に輝かし。』

義 『驕る平家を亡ぼすには、何んの手間暇入るべきぞ。』

兼 『先づ手始めに城資永の、北國勢を切從へ。』

實 『都へ押寄せ行までの、軍備を充分致すが肝要。』

權 『源氏の勢ひ盛んに成り、一日進むは平家に取り、一日後に退くなり、此實盛の運命も、連れて次第に縮まる道理、未は何處の土と成るやら。』

やら。

義 『斬らんとしたる平家の使者は、思ひも寄らぬ恩人にて。』

實 『刃の難はのがれしが、戦場にては是非もなし。』

兼 『弓を引かねばならぬとは。』

義 『誠につらき武士の意地。』

實 『義と言ふものゝなかつせば。』

權 『かくまで人の腸を、絞らで濟むに。』

兼 『皆々顔を見合せ思入ありて。』

實 『むはゝゝ。』

權 『後に遠くに本神樂を聴かせる。皆々キツト成りて。』

兼 『何處の神事か知らぬとも、時も時とて勇ましく、實に心地好き神樂の音。』

實 『あれこそ程も遠からぬ、上田天神の祭禮に、近郷近在村々の、牛を集

義 權

めて兩の角に、松明結び石段を、駈上らする合圖の神樂。

「木曾風俗の一つとして、他國には見ぬ式どかや。
「神樂も今日が聴納めと、十が九までは相成るべし、六波羅にての申
ひらき立ざる上は人質と、成りて苦しひまでもなし、潔好く切腹と覺
悟を極めたる此身なれば。

兼

「すりや父上には死を決して。

ト心かゝりの思入。

權

「今更それを聴く事か、素より一命かけての上洛、若し恙なく歸らば
格別、左なき時は父に代りて、義仲公の御方に成り、必らず大事を
やまるな。

トキツと言ふ、兼平是非なき思入ありて。

兼

「それは承知に御坐りまする、急ぎて軍備を整へし上、旗あげの手く

權

ばりに、少しも油断は致すまます。

「それ聴いて安堵せり、イザ此上は主従父子。

實

「敵も味方も一つ土器。

義

「逢ふての喜び。

兼

「別離の悲しみ。

權

「同じに酌んで。

皆々

「酔ひ申さん。

ト皆々土器を取上げる。侍女酌に立つ。此時山おろしはげしく、向

ふにて大勢鯨波の聲を上げる。皆立上り。

兼

「表の俄に騒がしきは、何事なるか氣遣はし。

ト大小入の合方に成りバタ／＼にて。向ふより縫ぐるみの牛の、角

先きに松明を付け、荒れながら出る。

これを留めながら侍士大勢出る。直ぐ本舞臺にかゝる。侍士皆々立廻

實 權 巴 實 兼 義 巴 權 權

り、ト、かなはずして逃げて這入る。此時上手より以前の巴御前出來り、此体を見て裨褱を脱ぎ一寸立回りて、ト、牛に冠せる。其上から角をつかみて捻倒しキツト見得。

「天晴なる女性の働き、如何なる人にも聴かされよ。」

「女に用なき力わざ、羞かしながら吾娘。」

「巴と申す不束者。」

「何に巴殿とな、男子も及ばぬ只今の手練、驚入りて候ぞ。」

「怪我の無きこそ幸ひなれ。」

「此上には捻伏せて、角を折つて見するべし。」

「左ぼどの力は御座りませぬ。」

「早く牛飼を呼出し、無事に其奴を。」

ト指圖するを木の頭。

「渡して遣れい。」

ト言ひつける、義仲實盛感じたる思入、兼平、平舞臺に下りて巴に力を合せ、牛を立木に繋ふとする。此模様よろしく、風の音、合方にて、幕

○二幕目 篠原宿陣門の場

本舞臺一面の平舞臺。向ふ山々の遠見。上手柵矢來に陣幕を張り丸木の陣門、中に源氏の紋附きたる白旗を幾流も立て。下手杉の立木にて見切り凡て陣所入口の体。茲に軍卒、一平、二作、三藏、四助、好き處に蕙を敷きて住ひ、酒筒を置き酒を飲んで居る、下手に商人平兵衛背負籠を下し、立かゝりて居る、此模様合方に山おろしを冠せて幕明く。

ト合方彈流しにて。

「これやい商人、もそつと酒を出し居らぬか、決して呑倒しは致さぬから、安心してドシ〜注いだり、代物は何時でも、綺麗に下げて遣

はずぞ。

平 『へい』 難有ふ御座います。

二 『それに何か肴はないか、只ぐびくと呑むばかりでは、折角の酒が無味くなつて、酔うても何んだか物足りぬわ。

平 『へい』 難有ふ御座います。

三 『難有ふ』と、跋足の馬ぢやアあるまいし、ピヨコ〜御辭儀をするにも及ばぬ、早く肴を出したり〜。

平 『へい』 難有ふ御座います。

四 ト平兵衛籠の中より竹皮包の煮びを出して、四助に渡す。

『おつと此奴は好物々々、酒も好し、肴も好し、中々和主は働くな、此上は代物の處も、精々安く働くが好いぞ。

平 『へい』 難有ふ御座います、夫はもう貴下方を目當に、商賣を致すので御座いますから、何んでも好い品を御安く致して、御氣に召すや

一 うに致しませんでは、へいへい毎度御愛顧には願はれませんが。

『高慢らしく申すのではないが、之でも源氏の軍卒さまだぞ。

二 『まさかの時は一番に逃出して、いつでも無事な我々共だ。

三 『借倒した上討死なんざア、決して仕子はありやア仕ないから。

『懸が取れぬなど、言ふ事もなし、和主の方には御爲め筋だせ。

四 『手前共には御爲め筋だが、御味方に取つては頼もしくない〇いえなに、頼もしい方々で御座りまする。

一 『それに此頃は勝利がついくので、我々まで工面がよいから。

二 『代物は直くに遣はずぞ、決して倒しは致さぬぞ。

三 『好いか、いつでも拂うて遣はすから、心配などはせぬが好いぞ。

四 『ぢやに由て酒も肴も、チビ〜出さずと有つたけ。

一 『此所へキリ〜。

皆 『出したり〜。』

ト皆々立掛りて背負籠より、酒筒、竹皮包を澤山に取出す、平兵衛
まご／＼しながら。

平 「へい／＼難有ふ御坐います。

ト門内にて。

六五 「見つけたく見付けたぞよ。

ト軍卒、五吉六内、出来る。

一 「や、組頭に見付けられたか、恐入ッて。

皆々 「御坐りまする。

ト皆々うろたへたる仕打。

五 「いや隠しても最う無益た、軍法破りし其方達。

六 「掟に照して一同に、成敗すからる心得る。

ト威張つて言ふ。

一 「左様でも御座りませうが、此所は御慈悲に御目こぼしを。

二 「一同揃つて。

皆々 「願ひまする。

五 「いや／＼、ゆるす事は相成らぬ。夫に第一不埒なるは、陣門をもわ

六 さまへず、のこ／＼入込むそれなる商人。

五 「賣りに来るから買ひもするのだ、其方より吟味にかゝれば。

「繩を打つて連れてゆくぞ。

トキツト言ふ。平兵衛驚きたる仕打にて。

五 「そればかりは御助けなされて、如何か御ゆるし被下りませ。

「ならぬ／＼相成らぬぞ。

ト平兵衛を無理に引立てやうとする、六内これを留めて。

六 「とは申すもの、無智蒙味の小商人ゆるゑ、今日はゆるして御遣りな

五 られ。

「ぢやと申して悪ツくき商人。